

中二病でも愛してる！

松野椎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ドラクエ魔法を持って、中二恋の世界へ転生した者は、ある少女と出会う……。

この物語は、魔法の使い方間違えた主人公が、中二病を患った人たちとわいわい楽しくやるお話です。

# 目次

## 小学生編

炎天下の…初会遇 | 1

少年少女の…初恋簿 | 8

憧れの…魔法使い | 14

## 中学生編

再開の…魔法魔王少女 | 21

初心の…放課後 | 27

契約の…恋人魔法(前) | 32

契約の…恋人魔法(後) | 37

秘密の…生誕祭 | 44

運命の…分岐点(前) | 53

運命の…分岐点(後) | 60

## 高校生編

邂逅の…魔法使い(前) | 68

邂逅の…魔法使い(後) | 73

## 小学生編

### 炎天下の：初会遇

突然だが、正直に告白しよう。俺、文月柊ふづきむらぎは転生者である。

いわゆる、トラックに轢かれて異世界に行くような類では無く、元の世界と少しだけ異なった現代へと生まれ変わるものだ。

簡単に説明すると、あの国民的RPGが売られていなかったり、中二病に罹った少年少女が巻き起こすラブコメディが無かったりと、その程度の違いを持った世界へと生まれ変わった。

話は少し変わるが、こういうお話には何かチートと呼ばれる能力が付き物だろうか？

俺もその例に漏れず、転生した際にある能力が宿っていた。それはDQ呪文。

つまり、ドラゴンクエストというこの世界には存在しないゲームに使われていた呪文は全て使えるという物だ。

正直、DQ呪文を使えると分かったときは歓喜した。だって、ゲームの中でさえ、あんなにワクワクした魔法だぞ！俺だって、魔法が使えたらなあ、って夢見たことは一度や二度では無い。

そんな現代人にしてみれば、生身で空を飛ぶ並の人類の夢が叶ったんだ。興奮しないはずが無い。

しかし、喜びもつかの間。よく考えてみたら、メラゾーマとか単身で兵器と同等の火力が出せそうな、危険極まりない呪文である。

特技はイオナズンです。とか言っている場合では無い。

呪文の花形である攻撃呪文が使えないことを多少残念に思いながらも、俺は素直に攻撃呪文を封印し、その分補助呪文や回復呪文に専念して特訓することにした。

具体的に言えば、自分に『ルカニ』を唱えて過負荷な筋トレをしたり、膝の痛みを悩んでいた隣に住んでいるおばあちゃんに『ホイミ』を唱えたりとか。

その甲斐あって、俺は小学校に上がる頃には周りの人々から、

「柊君？ ああ、何か不思議だけど良い子だよね」

という評価を頂けるようになった。

それにある日、相手の素早さを上げる呪文である『ピオリム』を好奇心から家にあったオンボロPCに唱えてみたところ、最新型を凌駕する程にスペックが高くなった。

この経験から、呪文には応用が効く事が分かり、俺は勉強そっちのけで日々呪文の研究をする事になったのであった。

さて、ここからのお話は、俺が小学5年生の夏休みの話である。

この夏休み、俺は運命の少女と出会うこととなる。

チウンチウン

「ふわあくあ、『ザメハ』」

俺の一日は、覚醒呪文である『ザメハ』から始まる。どれだけ眠たくても目が覚めるから、この呪文は大変便利だ。

早々に起きた俺は、日課のランニングをするためにジャージに着替え、まだ寝ている父と母を起こさないようにそっと外に出た。

朝の4時と起きるには些か早い時間帯だが、夏休みの今は既に太陽が昇っており、走るにはちょうど良い涼しさだ。

「さて、『ピオリム』『ルカニ』」

走る前に自分の体へ、素早さを上げる呪文と、防御力を下げる呪文をかける。これにより、効率的に体を鍛えることが可能になる。

この習慣を小学1年生から続けていたおかげで、今では呪文によるドーピング無しでもフルマラソンを走りきれるようになった。

澄んだ空気を、一度胸一杯に吸い込むと、

「よし、行くか」

と、言って走り出した。

タッタッタツ

そういえば言っていなかったが、俺が転生したのは、広大な土地に自

然溢れる北海道。その中でも割と田舎の方にある町だ。

それ故、ランニング中に見える景色は、畑や水田が多く、遠くの方では海も見える。

軽く周りを見渡してそんな景色を眺めていると、既に農家さんが働き始めているのが見えた。

「佐藤さんー！ おはようございまーすー！」

走りながら大きな声で話しかけると、佐藤さんはこちらに気づき、笑顔で手を振り返しながら、

「おーい、柊の坊主ー！ トマト採れたから持ってけー！」  
と言ってくれた。

それを俺はありがたく頂戴し、お礼を言って、佐藤さんと農場全体に『ホイミ』を唱え、ランニングへと戻るのであった。

袋一杯に貰った、よく熟れて美味しそうな大きいトマトを、佐藤さんから見えなくなった頃に『ふくろ』に入れるように念じる。その瞬間、手に持っていたトマトの袋が空間に溶け込み、消失した。

『ふくろ』も、呪文の練習をしている際に使えることが判明し、こうして有効に活用させて頂いている。

ちなみに、『ふくろ』の中に入った物は時間が進まないなので、新鮮な食材を入れるのに最適だ。

タツタツタツ

その後、2時間近くかけて約30kmを走りきった俺は、帰ってきてすぐ、自分に『ホイミ』を唱えて、疲労を取る。そして、6時になった時計を見て、朝食を作る準備をするのであった。

今日の朝食は、何を作ろうかな？ と、『ライデイン』を改良して作った呪文で電力を供給している冷凍庫を開けると、この前、漁師のおっちゃんから貰ったチカがあった。悪くならない内に塩焼きにでもするかと思い、取り出していると、

「おはよ〜、柊〜」

と、間の延びた眠そうな母の声が聞こえてきた。

「おはよう、母さん。今、朝食作るから、先に顔洗ってきて待ってて」「いつもすまないね〜」

「父さんも母さんも仕事大変だからね。これぐらいは俺がするよ」父も母も地域の総合病院で医師をしているのだが、地方の医師が足りないこのご時世、二人とも職場で仮眠を取って、そのまま連続勤務するなんてことも少なくない。

そんな忙しきで殺されそうになっている両親に朝食まで作って貰うのは、申し訳無いと思つた俺は、小学生に上がるとすぐに、家事をするようになったのであつた。

「よし、これで出来上がり!」

「お、チカの塩焼きか! 美味しそうだな」

料理が出来上がり、調理に使つていたメラの火を止めると、いつの間にか起きていた父が後ろから覗き込んでいた。

「父さん、おはよう。さっきランニングしている時に、佐藤さんから採れたてのトマト貰つたから、それも出すね」

「……柊、また一杯貰つたのか」

父が呆れたように言う。これは何故かというと、俺がランニング中に農作物や魚介類を頂く事があまりにも多いからだ。

今日トマトをくれた佐藤さんもそうだが、他にも秋になると米農家の方がお裾分けしてくれたり、脂がのつた鮭を何匹もくれる漁師さんが居たりと、毎月の食費が全然かからない程度には、海の幸・山の幸を貰う。

ちなみにこうして、お裾分けしてくれる方は総じて、ホイミの実験台となつて頂いている方である。本当にホイミ様々だ。

「ごちそうさま〜、柊、今日も美味しかったよ〜」

「ああ、また腕を上げたんじゃないか?」

朝食を食べ終わると、両親は笑つてそう言ってくれた。

料理は、前世で一人暮らししていた時に身につけたスキルだが、転生してこんな風に役に立つなんて夢にも思つていなかった。

「ありがとう、父さん、母さん。お弁当も作つたから、昼はそれを食べ

てね」

「分かったよ。ありがとうね、柊」

「ありがとう柊。本当にお前は良く出来た息子だよ」

父も母も心底嬉しそうに、弁当を受け取ってくれる。しかしその反面、二人からは申し訳なさそうな雰囲気が出ていた。

こういう時は大抵、二人とも夜勤が入っていて泊まり込みなんだよな、と分かっているものの確認のため、

「今日は二人とも泊まり込みなの？」

と、尋ねてみると案の定、

「ああ、そうなんだ……。本当にすまない、柊には寂しい思いをさせてしまつて……」

と言つて、謝る父であつた。

一応、俺は前世から含めると精神年齢はおじさんであり、そんなこと全く気にしないのだが、今の両親からしてみればまだまだ子供。心配なのだろう。

「心配しなくても大丈夫だから、二人は仕事頑張つてきて！」

そんな心配を取り除いてあげようと、俺がこう言つと両親は泣きそうになりながら、

「行つてきます！」

と言つて出発していくのであつた。

俺はそんな二人の背に向けて、ぼそつと『ホイミ』と呟くのであつた。

二人を見送つた後、俺は食卓を片づけ、掃除・洗濯をぱぱつとこなし、朝の10時には家事も一段落付いたので、残りは自由時間だ。

普段、呪文の練習はすぐ近くの山の中で行つているので、今日もそろそろ行こうかなと思つていると、朝貰つた大量のトマトの存在を思い出し、お隣のおばあちゃんにお裾分けしてから行くかなと思ひ直した。

ガラガラ



「島ばあちゃん——！ トマトのお裾分けに来たよ——！」

日中は鍵を開けっ放しにしている引き戸の玄関を開け、居間にいるであろうお隣の島さんに呼びかけると、予想通り居間の方から、

「柊ちゃん、いらっしやーい！ 悪いけど台所まで持つてきて貰っていいー？」

と、声が聞こえた。

その声を聞き、俺は靴を脱いで家に上がろうとしたのだが、その際に明らかに島ばあちゃんではなさそうな、可愛らしい白い靴があるのに気づいた。

誰かお客さんが来ているのかな？ と疑問に感じながら台所に行くくと、そこには俺と同じぐらいの年齢であろう、可憐な少女が居た。その少女は、黒髪のショートカットかつ、庇護欲をそえられるような小柄な子で、人見知りなのか、島ばあちゃんの後ろに隠れている。

俺は、その少女に一瞬で見惚れてしまった。

「柊ちゃん、どうしたんだい？」

気が付くと、島ばあちゃんの心配そうな声が聞こえてきて、俺は現実へと引き戻された。

「あ、なんでもないよ。はいこれ、佐藤さんから貰ったトマト」

「ありがとうね。ほら、智音ちゃんもご挨拶なさい」

島ばあちゃんに、挨拶するよう諭された少女は、恥ずかしがりながら、

「えっと、あの、ありがとうございます」

と言つて、ペこりと頭を下げたのであった。

それを見た俺は、あまりの可愛さに死ぬんじゃないかと思いつつながら、

「ごちそうさ、どういたしましてー！」

と、何とか返答するのであった。

これが俺と智音ちゃんとの最初の出会いであった。  
しかし、俺がこの少女が、中二病でも恋がしたい！  
と知るの、これから数年後の話である……。 の七宮智音だ

## 少年少女の…初恋簿

現在、俺と智音ちゃんは、お隣の島ばあちゃんの家の居間で、机越しに向かい合って、お話をしていた。

「えっと、智音ちゃんは、島ばあちゃんのお孫さんなのかな？」

「う、うん。そうだよ」

お話とは言ったものの、智音ちゃんはどうかやら、あまり積極的な性格ではないらしく、俺の尋ねた質問に答えるような形式での会話が続けている。

俺としては、もっと仲良く言葉のキャッチボールを楽しみたいのだが、これではまるでバツテイングセンターだ。

「そういえば、智音ちゃんはゲームとかする？」

「えっと、うん。少しだけ」

少しを言う時に、指でちよびつ、とやっている智音ちゃんは、凄く可愛かった。

それは兎も角、このままゲームで会話は続けられそうだなと思った俺は、更に、

「へえー、じゃあどんなゲームをやっているの？」

と聞いてみると、智音ちゃんは、

「……」

と、あまり聞いて欲しくなさそうに俯いて、答えてくれなかった。

これはどうしたものかと考えていると、智音ちゃんが、

「あ、あの！ い、一緒にゲームやらない？」

と、誘ってくれたのであった。

さて、智音ちゃんが誘ってくれたゲームとは、スーパーマリオブラザーズであった。ファミコン版の。

「あのね、皆、私がファミコンやってるっていったら、変だつて言うの」  
そう言つて智音ちゃんは、ぷくー、と頬を膨らませて怒る。

確かに2000年代に入って、ファミコンはもはや過去の遺物になつているかもしれないし、やっている人は珍しい。でも、

「ファミコンだって、面白いのにな」

「あなたも、ファミコンやったことあるの?」

俺がファミコンを擁護する発言をすると、智音ちゃんはすかさず、俺にそう聞いてきた。

「ああ、昔はよくやったものさ。マリオも、ドラクエも、もう少し言えばスペランカーとかも」

昔と言っても前世の事だが、俺がそう言うと、智音ちゃんは目を輝かせて、

「えへへ、一緒だ!」

と、初めて笑顔を見せてくれるのであった。

その破壊力抜群の眩しい笑顔は、瞬く間に俺の心に染み渡り、ますます智音ちゃんの事に見惚れてしまうのであった。

その後、一緒にマリオをしたり、島ばあちゃんが作ってくれた素麺を食べたり、沢山色んな事ををしている内にすっかり夜になってしまった。

「柊ちゃん。もうすぐ夜ご飯の時間だけど、帰らなくて大丈夫かい?」

そう島ばあちゃんに言われ、時計を見ると、もう既に時刻は午後6時を過ぎていた。

「あ、今日、二人とも居ないんだった。やばっ、ご飯炊いてない!」

あまりにも、智音ちゃんと過ごす時間が楽しかったおかげで、夕食の事など、すっかり頭から抜け落ちていた。

今からご飯を炊けば、7時過ぎには食事にありつけるかな? なんぞ考えていると、島ばあちゃんが、

「あら、今日はどっちも夜勤? だったら、晩ご飯は食べておいき」と、夕食にお誘いしてくれた。

しかし俺は、さすがにそれは、智音ちゃんと島さんの家族団欒を邪魔してしまう気がしたので、お断りした方がよいのではないかなんて思っていると、

「柊くん、帰っちゃおうの……?」

と、智音ちゃんが悲しそうな顔をして言ってきた。

その表情を見て心がズキッと傷んだ俺は、島ばあちゃんの方へと向

き直って、

「晩ご飯、食べていかせてもらっていいですか？」

と思考を一変させて、そうお願いをするのであった。

でも島ばあちゃん、頼むからそんな生暖かい目で俺のことを見ない  
てください……。。

その後、島ばあちゃんの温かい絶品手料理をご馳走になった俺は、  
お礼にこれぐらいはと、食べた食器を洗っていた。

「なんもいいのに、ありがとね柊ちゃん」

「美味しい料理を頂いたんですから、このぐらいは当然ですよ」

そう言ったつきり会話が途切れてしまい、外から聞こえる虫の声だ  
けが鳴っている室内。智音ちゃんは、今お風呂に入っているので、こ  
こには居ない。

沈黙が続いているのに若干気まずさを感じた俺は、何か話す内容は  
あるかなと考えていると、突然島ばあちゃんが語り始めた。

「……智音ちゃんが、あんなに楽しそうにしている姿を見たのは久し  
ぶりだったよ」

「え？」

思いがけない一言に驚いた俺は、思わず島ばあちゃんの方へ振り  
返ってしまった。

振り返った俺の方を一瞥した島ばあちゃんは、窓の外へと目を向け  
ながら続けて、

「あの子の親は転勤族でねえ、それに付き添って転校を繰り返すあの  
子には、仲の良い友達が少ないんだよ。それどころか、内気な性格も  
相まって悪口を言われたりする事も少なくない」

俺はその言葉に啞然とした。確かに子供は無邪気であり、時に残酷  
な事もしでかしてしまう。

しかし、智音ちゃんがそんな事になっているなんて……。

俺が驚いていると、島ばあちゃんはこちらを真っ直ぐ見つめてき  
て、

「お願い柊ちゃん、あの子がこっちに来ている1週間の間、一緒に遊ん

「であげてくれない？」

「それは勿論構わないですし、むしろこっちがそうしたい位ですが、良いんですか？　俺なんか」

自分で言うのも何だが、俺は子供らしからぬ子供だ。そんな子と一緒に遊ばせても良いのかなと思っていると、

「何言ってるの！　柊ちゃんが一緒に居てくれるだけで、おばあちゃんには安心よ。だって柊ちゃんは優しい子だもの」

「そんな事は無いと思いますが、そう言っただけなら」

俺がそう言うと、島ばあちゃんはほっとしたようで、

「それじゃあ、宜しくね！」

と言うのであった。

ボンボン

時計の鐘が鳴る音が聞こえ、ぱつと時刻を見てみると、時計の針はもう8時を指していた。

「もう8時か、じゃあ俺はそろそろ帰ります」

「そうかい、隣とはいえ気をつけて帰りなさいよ」

島ばあちゃんは、そう言ってくれる。本当に優しい方だ。

「智音ちゃんも、また明日遊ぼうね」

「うん！　待ってるね！」

智音ちゃんは、元気いっぱいぶんぶんと手を振ってくれた。

その表情は、先程とは打って変わって、とても嬉しそうだった。

「はあく、ただいま」

誰も居ない家に向かって、誰も返事はしてくれないとは分かっているながらも、帰宅を告げる。

今日は中々濃い一日だったなと思いつながら部屋にある布団に倒れ込むと、智音ちゃんの顔が浮かんできた。

「智音ちゃん、可愛かったな。断じて俺はロリコンではないけども」

そうは言えども、あの少女に心を打ち抜かれてしまったのは事実だった。

「はあ、まさかこの年で恋してしまうとは思いませんでした……」  
肉体年齢的には大体同じものの、精神年齢で言えば何十歳も違う。  
俺は、一体どうしたいのだろうか、と頭を悩ませながらも、夜は  
更けていくのであった。

コチコチ

「今日は楽しかったな〜」

私、七宮智音はお布団に寝ながら、今日会った柊くんのことを考えていました。

柊くんは背もおつきくて、着ていたジャージ越しても分かるぐらいに筋肉が付いていて、最初会ったときは怖くておばあちゃんの後ろに隠れてしまいました。

でも、柊くんとお話してみると、とつても優しかったです！

私がファミコンやってるって言っても笑わなかったし、夜ご飯になって柊くん帰っちゃうのかなと寂しく思っていたら、一緒にご飯を食べてくれたり。

しかも、明日も一緒に遊んでくれるらしいです！ とつても嬉しい！

「はあ、学校の皆も柊くんみたいに優しくかったらな〜」

私はお父さんのお仕事の都合で、1年ぐらい経つと引越してしまいます。だから、何回も転校したことがあります。

でも、どの学校でも、私はひとりぼっち。仲間に入ろうとしたことは何度もあるけど、いつも断られてしまうし、ひどいときには嫌なことを言われてしまいます。

お家でも私は大体ひとりぼっち。お父さんもお母さんもお仕事が忙しくて、夜遅くまで帰ってこられません。

だから、夏休みとか冬休みはずっと寂しい日が続きます。

でも、今年はおばあちゃんの家泊りに来たし、柊くんとも会えたから良かった〜。

「また明日も、いっぱい遊べるかな？ 楽しみ！」

こうして、二人の少年少女は明日を待ちわびながら眠りについていくのであった……。



## 憧れの…魔法使い

翌朝、ランニングの日課をこなした俺は、昨晚の内に炊いておいたお米でおにぎりを握っていた。

このおにぎりは、俺の朝食兼、両親が仕事から帰ってきたときに食べられるようにと置いておく軽食だ。

「やっぱり、呪文って便利だよな」

両親用のおにぎりに『ホイミ』をかけながら、独り言を呟く。

最近、『メラ』による調理や、『ヒヤド』による冷凍など、本来攻撃呪文であるはずの魔法さえ、ただの便利道具と化した使い方をしている。

何だか、呪文の無駄遣いをしている気がしないでもないが、光熱費の節約にもなるので、良しとしよう。

「さて、おにぎりは作り終わったから次は『バギ』」

ドラクエの設定では、真空の刃を打ち出して敵を攻撃する呪文である『バギ』だが、少しだけ改良してやるとあら不思議、小さなつむじ風で家中のゴミを集める便利呪文へと早変わり。

……偶には掃除機も使って、きちんと掃除した方がいいのかな？

そんなとりとめのない事を考えつつも、俺は朝食のおにぎりを頬張りつつ『バギ』を操作して、家中をぴかぴかにするのであった。

「よし、もう9時だな。そろそろ智音ちゃんの所に行くか」

あの後、更に筋トレと呪文の練習を終えた俺は、自分に『ホイミ』をかけて体力を回復させながら、お隣へと向かう。

ガラガラ

例によって鍵がかかっている引き戸の玄関を開け、

「おはようございまーす！ 柊です、遊びに来ました！」

と、呼びかけると、何やら居間の方からドタバタという音が聞こえてきて、次の瞬間、すごい勢いで俺の方目掛けて智音ちゃんがやってきた。

「おはよ、柊くん！」

目の前に現れた智音ちゃんは、半袖と短パンという暑さに強く動きやすい格好をしていて、やや細身ながらも、子供らしい健康な肢体を存分に見せつけてくれていた。

昨日に引き続いて思わず見とれていると、智音ちゃんは、

「柊くん、今日は外で一緒に遊ぼう！」

と、ぴよこぴよこ跳ねながら元気よく、そう告げるのであった。

その後、早く遊びたい智音ちゃんを少し引き止めて、島ばあちゃんに挨拶をする。

それから俺と智音ちゃんは、夏の強い日が差している外へと出た。外に出るとすぐに駆け出した智音ちゃんは、道路の少し先に行つてからこちらの方を振り向き、

「柊くん、はやくはやくー！」

と、手招きをする。

智音ちゃんは行動が一々可愛いなあ、と思いつつながら俺は、

「ちよつと待ってー！ 『トヘロス』『トラマナ』」

と、自分と智音ちゃんに2つの呪文をかけてから追いかけた。

ちなみに、『トヘロス』は自分より弱い敵が出て来なくなる呪文であり、ここでは虫除け魔法として機能する。

蚊や蜂なんかも出てこなくなるので、夏、秋に屋外で活動する際にはこの呪文は欠かせない。

尤も、蜂に刺されたところで『キアリー』による毒消しがあるのであまり問題はないがな。

もうひとつの『トラマナ』は、元は毒の沼地や溶岩によるダメージを受けなくするという呪文なのだが、試しに使ってみたところ、日焼け止めにもなる事が分かったので、今日みたいに日差しが強い日には必要だ。

特に、智音ちゃんの綺麗な肌を日焼けさせる訳にはいかないからな。この呪文は念入りにかけておく。

「おー！ 柊くん足速いんだね！」

智音ちゃんが手招きしてから数秒後には追いつくと、智音ちゃんは

そうやって褒めてくれた。

「これでも毎日ランニングしているからね。足の速さと持久力には自信があるよ」

とはいえども、それは呪文を使って身に付けた能力だから自慢にはならない。

若干の後ろめたさを感じながらも、話題の転換を図ろうと、

「そういえば、今日は外で遊ぶって言ってたけど何処で遊ぶか決めているの?」

と尋ねると、智音ちゃんは、

「おばあちゃんが、山には面白いものがいっぱいあるよ、って言ってたから山に行こうと思うの!」

と返答してきた。

いやいや、ちよつと待て島さん。あなた、孫をなんでそんな危険な場所に行かせようとしてんですか!

「さ、智音ちゃん。山に行くのは少し危ないんじゃないかなあ、って思うんですが……」

「え、でもおばあちゃんは、一人なら危ないけど柊くんと一緒にだったら危険なんて何もないって言ってたよ?」

小首をかしげながら、そう言う智音ちゃん。

島ばあちゃんよ、確かに俺は山の中で呪文の特訓をしていますし、ヒグマが出ようとも大丈夫ですが、流石にそれは買い被り過ぎではないでしょうか……?」

島ばあちゃんからの無駄に厚い信頼に頭を抱えながらも、保護者の許可が出ているならと、俺は智音ちゃんと山へと向かうのであった。

「はあはあ」

「智音ちゃん、大丈夫?」

「だ、大丈夫だよ」

山に入ってから15分。

智音ちゃんの要望で、景色の良い所まで行こうという事となり、それならばと、俺が普段呪文の特訓をしている所へと案内していたとこ

ろ、智音ちゃんがバテてしまった。

本人は大丈夫だと言っているものの、これでは着けそうにないなと思った俺は、智音ちゃんに『ホイミ』をかけてやる。

「あれ、疲れがなくなった？　もしかして、柊くんが何かしてくれたの？」

「さあ？　山の神様が何かしたんじゃないかな？」

呪文の事を知られてしまつては困ると考えている俺は、こうして聞かれてもシラを通すようにしている。

突然疲れがなくなった事に驚いているものの、智音ちゃんは俺の様子を見て察したのか、

「えへへ、ありがとう。柊くん」

と、嬉しそうに言うのであつた。

智音ちゃんはどうかやらとても聡い子のようだ。

その後、数回『ホイミ』による体力回復を施しながらも、俺たちは見晴らしの良い地点へとやつて来られた。

「わー！　綺麗な景色！」

「そうだね、智音ちゃん大丈夫？　疲れてない？」

「うんと、ちよつと疲れちやつたかな」

それは無理もない。『ホイミ』はあくまでも肉体的な回復呪文であり、精神的な疲れは取り除けないからな。

「それじゃあ、智音ちゃん。丁度いい時間だしお昼ご飯にしようか」

「え？　でも、私何も持つてきてないよ？」

そう言つて不安そうな顔をする智音ちゃん。

大丈夫。そんな心配しなくても、俺には『ふくろ』という色んな食料が入っている倉庫があるのだ。

おろおろしている智音ちゃんを尻目に、何か無いかな？　と、『ふくろ』の中身を取り出すべく虚空に手を突っ込むと、

「ひ、柊くんの手が消えちゃった！」

と、隣から驚く声が聞こえた。

この動作、他人からはそんな風に見えていたんだ、と一人納得して

いると、昨日貰ったきゆうりを見つけて、『ふくろ』から4本取り出した。

「はい、お昼ご飯にこれだけっていうのもちよつと変だけどいいかな？」

そう言つて、智音ちゃんにきゆうりを差し出すと、智音ちゃんは何も言わずにフリーズしてしまった。

少し色んな事を起こしすぎてしまっただろうか？

そう思っていると、突然智音ちゃんが目を輝かせながら、

「ま、魔法だー！」

と、大声で叫ぶのであった。

「ねえねえ、柊くん。今きゆうり取り出したのも、さつき私の疲れを取ってくれたのも魔法なんですよ！もしかして、柊くんって魔法使いなの？」

フリーズが解けた途端、矢継ぎ早に質問を浴びせかけてくる智音ちゃん。

まさか、こんなに反応してくれるとは予想外だった。

さて、これはどう返せばいいのかなと考えた結果、俺は

「ああ、そうだよ。俺は魔法使いなんだ」

と、言うのであった。

この言葉を聞いた智音ちゃんは、更に一段と目を輝かせたのであった。

「はあ、子供の体力を完全に舐めていた……」

この後、智音ちゃんにせがまれて炎や水を出したりして遊んだ俺は、かつてない程に疲労を感じていた。

「すうすう」

智音ちゃんは、山登りの最中はおんなに疲れていたのに、どこにそんな体力があったんだという程、元気に遊んでいたのだが、電池切れしてしまったようで今は俺に膝枕をされながら、すやすや眠っている。

「……そろそろ暗くなってきたな」

時計が無いから分からないが、空がだんだん夕焼けに染まってきており、もう6時近い時間になっているだろう。

「気持ちよさそうに眠っているなあ。起こさずに帰るか」

智音ちゃんの寝顔を見た俺は、そのあまりに安心しきった表情を崩すのが気が引けたため、体勢を変えて智音ちゃんを背負うと、

「よし、『ルーラ』」

島ばあちゃんの家の前に瞬間移動するのであった。

さて、それからというものの、俺と智音ちゃんは毎日毎日これ以上無いぐらいに楽しく遊んだ。

時に水風船をしたり、またゲームをして遊んだり、何日目からかは智音ちゃんが朝のランニングに付いてくるようにもなった。

俺の親からも何度か冷やかされたりしたりもしたが、智音ちゃんも満更でもなさそうにしていたので、きつと智音ちゃんも俺と同じ気持ちだったんだろう。

……しかし、どれだけ楽しい時を過ごそうとも、出会いがあれば別れがある。

智音ちゃんがおばあちゃんの家に居る、1週間という期限はあつという間にやってきたのであった。

「ぐすん、まだここで終くと一緒に居たいよ……」

今にも涙が零れ落ちそうな表情をしながら、そう言う智音ちゃん。

しかし、帰りの飛行機の時間もあるので、もう少ししたら空港へと行かなくてはならない。

「俺も智音ちゃんと遊んでいる時は、凄く楽しかったよ」

「うううう、終くんとお別れなんてやっぱり嫌だよー！」

そう言っただけで智音ちゃんは、俯いて涙を零し始める。

……智音ちゃんの気持ちは痛い程よく分かる。だって俺も同じ気持ちだから。

でも、どうしようもないことはあるのだ。隣を見れば、島ばあちゃんが困ったような顔つきをしている。

どうしたものかと思っていると、俺は前世で読んだある小説の言葉

をふと、思い出した。

「智音ちゃん。俺たちは世界のどこかに必ず居るんだから、これは別れじゃない」

智音ちゃんはその言葉を聞き、俯いていた顔を上げた。

「だからね、智音ちゃん。またね！」

そう告げると、智音ちゃんは俺の言葉を理解したようで、

「うん、柊くん。またね！」

と、泣きながら笑顔で言ってくれるのであった。

俺は、智音ちゃんの乗った車を見えなくなるまで見送りながら、さっきの自分の言葉を思い出していた。

あの言葉は、中二病でも恋がしたい！ の七宮智音が言っていた台詞だ。奇しくも、あの少女も智音という名前である。

「……まよかね」

## 中学生編

### 再開の……魔法魔王少女

あの少女と出会ってから、3年と半年が経った。

あれから、俺は夏になる度に、もしかしたら智音が来るのではないかと淡い期待を持っていたのだが、残念ながらその期待が叶うことは無かった。

智音の姿は、夢か幻だったんだろうかと考えた事も少なからずあったが、あれが現実だった事は魔法を使わなくなつて分かり切っている。

中学3年生。中学校最後の年であり、高校受験が控えている年。

俺は、前世という大きなアドバンテージと、『思い出す』という呪文による裏技がある為に、中学校に入ってから常にトップを取り続けていた為、どんな高校でも合格する事間違いないと言われていた。

よつて、俺にとつて学校とは退屈なものでしかなかった。そう、この日までは……。

「おはよう、鈴木」

「おう、おはよう文月。なあなあ、今日この学校に転校生が来るらしいぞ」

隣の席に座る鈴木に挨拶すると、転校生という情報が伝えられる。

「そっか、楽しみだな」

「つたく、文月は相変わらずそういう事に興味無さそうだな。そのスペックなら彼女の一人や二人すぐ出来るだろうに、残念な奴だな」  
棒読みで返答したところ、残念な奴に認定されてしまった。

余計なお世話だが、今世で彼女が出来た事がないのは事実であるので否定は出来ない。

「はあ、と思わず溜息をついていると、担任の退職間際なお爺ちゃん先生が前の扉から入ってきた。

「こほん、今日は皆さんに転校生を紹介します。では、入ってきて下さ



い」

担任が早々に転校生が来る事を知らせると、途端に教室内が沸き立つ。転校生が来るぐらいではしやぎすぎな気がするが、珍しい事だから仕方ないのだろう。

それでもでも、俺には関係ない事だと思い、やってきた転校生の方を見ずに窓の外をぼーっと眺めていると、視界の端に鮮やかなピンクが見えた。

「にっ—はっはっ！ 龍が住まうと言われし巨大湖がある所からやってきた、ソフィアリング・SP・サターン7世！ 巷で有名な魔法魔王少女——」

「七宮智音—」

その口上を聞いた瞬間、俺は思わず椅子から立ち上がって叫んでいた。

この時俺は、物語の中だけの存在であった人と会えた興奮と、何年もの間会いたいと思いつけていた智音と再会出来た喜びから、じっとしている事なんて出来なかつたのだ。

教室の全員から、自分に目を向けられているのも気にとめず、俺は智音、いや智音ちゃんに、

「久しぶり、智音ちゃん—」

と、言うのであった。

それに対し、智音ちゃんは、

「うん。終くん、久しぶり—」

と、満面の笑みで言ってくれるのであった。

この後、俺と智音のやり取りに置いていかれてしまった皆に向け、改めて中二病的な自己紹介をした智音は、その奇抜なピンク色の髪や長いマントの事なんてさておき、クラスの皆から俺との関係性について質問されてしまう事となる。

「いやー、まさか文月には既に恋人が居たなんて」

「うるせえ、っ—か恋人じゃないし……」

「いやいや、お前あんなに熱い再会を皆の前で繰り広げておきながら、

それはないだろ」

朝のHRが終わるとすぐに、鈴木がそうやって冷やかしてきた。

確かに俺は智音が好きだったし今でも好きだけど、きつと智音は勇太の事が好きはずだ。俺ではあのダークフレイムマスターには太刀打ちできないだろう。

既に半分失恋しているような今の状況にはあ、と溜息をついていると、当の本人がこちらにやって来た。

「魔法使い、会いたかったよー!」

「ああ智音、本当に久しぶりだな。もう3年以上経つか?」

「チツチツチツ、魔法使い。今の私はソフィアちゃんだよ? 真名で呼ばれてしまったては格好がつかないじゃないか」

智音は、すっかり中二病に染まってしまったようで、俺に自分の設定中の名前を呼ばせようとしてくる。でも、

「俺にとっては、智音はいつまでも智音ちゃんなんだよ。だから勘弁してくれ」

手を合わせて智音にそうお願いすると、智音は恥ずかしいのか、ほんのり顔を赤く染めながら、

「も、もう、しようがないなあ。魔法使いだけ特別なんだからね」と許可してくれるのであった。

そのまま、俺と智音の間には不思議と心地好い沈黙が流れていたのだが、

キーンコーンカーンコーン

授業開始のベルの音に急かされて、智音は自分の席へと戻っていくのだった。

そういえば、智音のあのピンク髪はよく許されたな? それだけが授業が始まってからも頭の片隅のから離れなかった。

「魔法使いー! 一緒にお昼ご飯食べよー!」

午前の授業も終わり、昼食を取るべくお弁当の準備をしていると智

音がこちらにやって来た。

「ああ、一緒に食べようか」

「ありがとう、魔法使い！ いやー、それにしても給食の無い中学校だったとはね。おばあちゃんが教えてくれなかったら私はお昼抜きだったところだよ！」

明るくそう言う智音。

とはいえ、この学校には購買があるのでそんな事にはならないと思うがな。俺も分けてやるし。

「それにしても智音は、随分と変わったな」

「についはっはっ！ ソフィアちゃんは、魔法使いと出会ったからこそ、こうして自分の殻を破る事ができたのさー！」

「俺と出会ったから？」

俺と智音なんて、小学生の頃たった1週間一緒に遊んだだけの仲なのに、そんな事有り得るのか？

俺が疑問に感じていると、智音はまるで心を読んだように、

「そう、私は魔法使いに出会った後、あんな風にカツコよくなるためにはどうしたらいいのかな？ って、ずっと考えていたの」

と、今までとは打って変わり、真剣な表情をしながら話し始めた。

いつの間にか、昼休みに入ってがやがやと騒がしかったクラスが静まり返っている。

「それで私はある時、中二病と呼ばれるものがあるのを知った。それを知った時、私は自分をさらけ出せるって素敵な事だと思ったの」

朝と同様にクラス中がこちらを興味津々といった様子で見ている。

「だから私は中二病になった。中二病の仮面を被る事によって、自分の全てを見せられるようになった」

既にこの話を聞いているクラスメイトの何人かは泣きそうになっていた。どんだけ涙脆いんだよ……。

「それに、覚えているか分からないけど、魔法使いが最後に言った、『世界のどこかにいるんだからこれは別れじゃない』っていう言葉。あれは、あれからずっと私の大事なモットーなんだよ？」

ああ、そうか。

「あれから何回も転校をしたけれど、その言葉があつたから私は何があつてもやつて来れたの」

俺は、俺は智音の――

「だからね柊くん、ありがとう！」

――魔法使いマジックユーザーになれたんだ

この時の俺は、智音の事を知らず知らずの内に助けられていたという喜びと、あの時智音と別れてからずっと恋焦がれていた熱い思いが心の中で渦巻いていた。

だから、こんな事を言ってしまったんだろう。

「智音、好きだ。付き合ってくれ」

流れるように口から飛び出した、智音への告白。

やってしまったと後悔した時には既に遅く、智音は目を見開きながら、驚いた顔をしてこちらを見ている。

「あ、いや智音、これはだな……」

「……魔法使い、いや、柊くん。私も柊くんの事は大好きだよ。だからね、」

そこ智音は一旦言葉を区切り、大きく深呼吸をした。

それから、俺の目を真っ直ぐ見つめながら、

「私の方こそよろしくお願いします！」

と言って、頭を勢いよく下げながら俺の告白をOKしてくれたのだった。

パチパチパチ

智音が告白を受け入れた瞬間、先程から俺たちの方を見ていたクラスメイトやいつの間にか廊下から覗いていた後輩達。

果てには、購買部へと行くために通りがかつたのであろう先生までもが拍手で祝福してくれた。

あまりにも気はずかしい状況から智音の方を見てみると、智音は予想外の大きな祝福に照れているのか、着用していたマントを頭から被り、

「こ、これでいかなる精神攻撃も無効だよ！」

と言って、真っ赤に染まった顔を隠す。

その姿を見た俺たちは全員、その可愛い智音の行動に笑みが溢れてくるのであった。

まあ、だから。

また、あの小説の言葉を借りるとするならば、

『俺がこの世界に転生したという偶然と、魔王と魔法使いが出会ったという偶然が重なれば、最後には魔王と魔法使いが惹かれ会うのは必然なんだよ！』

っていう話だったら嬉しいなと思う、俺なのであった。

## 初心の……放課後

「智音、大丈夫か？」

「にはは……。さすがの魔王でも、あの質問責めは疲れちゃったよ。」  
学校からの帰り道、俺と智音は一緒に並んで歩いてた。

智音の言う質問責めとは、あの昼休みの告白の後に男女どころか先  
生生徒までも問わず、根掘り葉掘り俺と智音の関係を聞いてきた事  
だ。

転校初日から告白された智音に皆は興味津々であった為、今年は受  
験生だというのにも関わらず、5時間目に掛かってしまうまであれこ  
れと質問をされてしまった。

「私も10回近く転校は経験した事あるけど、あんなのは始めてだっ  
たな〜」

「何か、うちの学校の連中が悪いな。皆、ノリのいい奴らなばかりに  
……」

根は悪い人たちでは無いのは、俺も小学生の時から知っている奴ら  
なので凄くよく分かっているのだが、こういう事があるとすぐ話題の  
的となってしまうのだ。

智音が気分を害していなければ良いのだが、と思っていると智音  
は、

「ううん、皆、凄く良い人だよ！ だって、明らかにおかしい格好で現  
れて意味不明な言動をしている私に、こうして話しかけてくれたんだ  
よ。むしろ、ありがとうだよ！」

と、慌ててクラスメイト達を擁護した。

「それに魔法使いだって、あの時とだいぶ変わってしまった私を、なん  
の躊躇いもなく受け入れてくれたじゃない！」

「智音……」

俺は前世に見て読んでいたから知っていたとはいえ、普通こんな人  
を見たら危ない人だと思ってしまうだろう。

もし俺が、智音がこうなってしまうのを知らなかったとしたら、一  
体どんな反応をしていたらどうかと想像すると、恐ろしい。

「なあ智音、手、繋がらないか？」

「ん？ いいけど、急にどうしたの？」

「なんでもないよ。ただ智音と、もっと近付きたいなって思っただけ」  
ifの話で怖くなってしまった俺は、これからは智音をずっと守り続けるぞ！ という意志を持って、智音の手をぎゅっと握った。

「ありがとうね、私の魔法使い」

あの頃と変わらず聡いままであった智音は、どうやら俺の心を見透かしてしまったようで、聞こえるか聞こえないか位の音量でそう呟いたのだった。

それからしばらくの間、俺と智音の間には沈黙が流れており、お互いの手から感じる体温だけが優しく二人を繋げていた。

このままずっと居たいなと思いつつも、もっと智音と話したい事がある俺はその沈黙を破り、まず疑問に思っていたことを聞いた。

「なあ、智音。その髪ってやっぱり染めているのか？」

その質問を聞いた智音は、少しバツの悪そうな顔をしながら、  
「うん。そうだよ」

と答えた。

それを聞いた俺は、自分よりも15cm程背の低い智音の、ピンク色に染まった髪をじっくりと観察する。

すると、やはり染めた影響が出ているのか、所々の髪が傷んでいた。

「智音も女の子なんだから、髪は大切にしろよ。『ホイミ』」

回復呪文をかけると、すぐに最初に出会った時のようなさらさらの髪へと変化する。

智音は、その呪文をかけられた瞬間にそれを理解したのか、

「魔法使いは、やっぱり本物の魔法使いなんだね！」

と言って、まるであの時のように目を輝かせた。

最近あまりにも人の前で呪文を使い過ぎてしまったせいで、誰からも智音のような新鮮な反応をしてもらえなくなってしまったので、正直嬉しい。

だから、その反応に気を良くした俺更には調子に乗ってしまい、

「折角だから、その髪も染めなくて済むようにしようか。『レミール』  
智音の髪を綺麗なピンク色にしてしまうのであった。

『レミール』とは、本来自分の周りに光を発生する呪文であるのかだが、これをどうにかして応用を効かせられないかと考えていた結果、自分が使える呪文の中でも一、二を争うような便利呪文へと生まれ変わった。

今、俺が智音にした事は、智音の髪から反射する光をピンク色に調節する事で、これにより人からはまるで髪がピンクであるかのように見える。

そんな事出来るのかと言われれば、やったら出来たんだからしょうがない。

「ん？ また私の髪に魔法をかけたようだけど、一体何をしたのかな？」

「それは帰ってからの楽しみという事で」

「まさか、呪いをかけたのか！」

それは違う違うと言いながら、俺と智音は、繋いだ手をお互いにまたぎゅっと握りしめて、ゆっくり家へと帰って行くのであった。

さて、あれから家に帰った俺たちは、仕事から丁度帰ってきた俺の両親や、回覧板を回していた島ばあちゃんと家の前でぼったり鉢合わせしてしまい、思いつきり冷やかされる事となる。

そして終いには、孫の顔は早く見れそうね。なんて言葉をかけられてしまい、俺と智音は告白の時以上に恥ずかしい思いをしたのであった。

その状況から6時間程進み、今は真夜中。

俺は、一人布団の中で今日一日の出来事を整理していた。

「今日は智音が転校してきて、智音に告白してOKされて、智音と手を繋いだ、って智音の事しか無いな！」

今日の智音のあらゆる可愛さを思い出して悶えていると、自分は本当に智音に心の底から恋しているんだな、と実感する。



しかし、俺は一方で智音に罪悪感を覚えていた。それは、ダークフレイムマスターこと富樫勇太との事だ。

中二病でも恋がしたい！ のアニメ2期や、その原作小説2巻を読んだ者なら分かるだろうが、多少の違いはあるものの、アニメ版、小説版、どちらも七宮智音は主人公である富樫勇太に恋をしている。

だけど、富樫勇太には既に小鳥遊六花という彼女が居て、最終的に七宮智音は、彼女が勇者と呼ぶ富樫勇太に失恋をする。というのがそのぎっくりとした流れだ。

ここで疑問になるのが、何故智音は俺の告白を受け入れてくれたのか、という事だ。

先程述べた二つの物語。その特に小説版では、七宮智音は小鳥遊六花を誘拐して富樫勇太と勝負する程に、富樫勇太の事が好きだったはずだ。

それにアニメ版でも、七宮智音は中学生の時に富樫勇太への恋心を持ち、それは一度は捨てたものの、高校生になり再会を果たした後にもう一度恋に落ちてしまうというストーリーだった。

「下手に原作知識なんて持ってない方が幸せだったのかもな……」

もし、俺が告白してしまったせいで、智音が勇太へと恋していた心を切ってしまったのだったら、そうでなくても、高校に上がって再度勇太に出会ってそちらに恋してしまったら……。

自分の頭の中では、そんな後ろ向きな考えがぐるぐると渦を巻いていて、恋人になって1日目だというのに、心は不安でいっぱいなのだった。

「……願わくば、智音とずっと一緒に居られますように」

「はあ、柊くん。相変わらずカッコよかったな」

私、七宮智音は、今日3年振りに再会した柊くんの事を一人布団の中で想っていた。

「でも、まさか柊くんが私に告白してくれるなんて……!」

私は柊くんが告白してくれた時の事を思い出して、嬉しさと恥ずかしさがごちゃ混ぜになった感情を、布団に足をばたばたさせながら囁

み締めていた。

普段は中二病をしていますが、あくまで私は女の子だもん。こうなっちゃうのは仕方ないよね。

「それにしても、柊くんは本当に魔法が使えるんだな〜」

元々は自分の内気な性格を隠すために作った仮面である、中二病。

中学校に入ってから、勇者やモリサマーと出会って、中二病も楽しいと心の底から思っていたのだが、そんな遊びなんかでは無く、本物が使える柊くん。

家に帰ってきてお風呂に入った際に、自分の髪が綺麗なピンク色になっっている上に、傷んでいた髪が元に戻っていたのを見た時は、凄くびっくりしたよ！

「ずるいなあ……」

それは魔法が使える事へと妬みでは無く、柊くんがそんな大きな力を持っているながら、こうして他人の為に使える事への尊敬。

自分だったら、きっとできないだろう事を当たり前のようにやっつてのける柊くんの優しさ。

「……ほんと、あの時から変わってないんだから」

小学生の頃に、柊くんとお会いできなかったとしたら、私は未だにあのまま内気な暗い少女だっただろう。

不器用な私には、こうして中二病の仮面を被る事しかできなかったけれど、本当に感謝しているんだよ。魔法使い。

それに、これもいつかはちゃんと言葉にして伝えておかなきゃ。

『初恋を叶えてくれてありがとう』  
ってね！

## 契約の…恋人魔法（前）

俺と智音が付き合い始めてから1週間が経過した。

あれから俺たちは、大変仲の良い素敵なカップルとして学校全体に受け入れられていったのと同時に、俺と智音は毎日登下校から休み時間まで、一日の大半を一緒に過ごすようになった。

しかし、智音と付き合い始めたあの夜、俺が想像していた不安は未だ拭いきれずがあり、智音に勇太の事を直接尋ねたとしても、何故俺が知っているのかという話になってしまっているので、一人悶々と考えざるを得なかった。

「おーい、魔法使い。一緒に帰ろー！」

帰りのHRが終わるとすぐに、智音は俺の席までやって来て、そう誘う。

「よーし、それじゃあ帰るか」

俺は机の横に掛けていた鞆を手に持ち、もう片方の手で智音の手を取る。

すると智音は嬉しそうな表情をしながら、俺の手をぎゅっと握り返してくれた。

「こうやって魔力はちゃんと補給しないとね！」

本気なのか照れているのか判別がつきにくい言葉を言う智音だったが、どちらにしろ喜んでくれているようなのでよしとしよう。

そうやって、教室の中から二人で恋人らしくイチャついていると、まだ帰っていないかった同級生達が、

「ヒューヒュー、今日も暑いね」

「結婚式には招待しろよー！」

といった風に、俺と智音を囁し立ててくる。

流石の智音もこれは恥ずかしかつたらしく、また耳まで真っ赤に染めながら、あうあう言って狼狽えている。

そういう俺も、クラスメイト達からほっこりした眼差しを向けられてしまうのは大層恥ずかしい。

結局、俺たちはそんな生暖かい目から逃げるように教室を飛び出し

たのだった。

「そうだ智音、明日何か予定が入っていたりする？」

学校から出てすぐ、俺は智音に明日の予定を確認する。

「ううん、明日は特に何も無いよ？」

俺が自分の予定を聞いた事を不思議に思ったのか、智音は少し首を傾げながら答えてくれた。

何故俺がそんな事を聞いたかというと、

「ならば、明日俺とデートしてくれないか？」

智音をデートに誘う為だ。

その俺の誘いを聞いた智音は、最初は頭の中で繋がらなかったように頭にはてなを浮かべていたのだが、すぐに理解をしたようで、口をあわあわさせて慌てている。

「で、で、デート!? 私と柊くんが?」

「あ、嫌だったら別に良いんだけど……」

「ううん、全然嫌なんかじゃない! 私も柊ちゃんとデートしたい!」  
あまりの驚きに、思わず柊くん呼びにもどってしまっている智音。

俺が嫌だったかな? と考えていると、智音はそれを否定して自分も望んでいる事を教えてくれた。

「じゃあ、決まりだな! 明日は学校休みだし、朝10時に迎えに行くから」

「うん! 楽しみにしてるからね!」

満面の笑みで、俺にそう伝える智音。

それを見た俺は明日、何としてでも智音を楽しませようと、心の中で強く決意したのであった。

翌日、いつも通り日が昇る頃に起きた俺は、今日の予定について考えていた。

「あく、智音って何好きなんだろう? そういえば俺、智音の事全然知らないんだな」

彼氏としては、初デートは何としてでも成功させたいところ。

しかも、俺には『ルーラ』という瞬間移動魔法があるので、基本的にはどこにだって連れていく事が可能だ。

でも、だからこそ、あまりにも多い選択肢に俺は頭を悩ませる。

「というか、そもそもプランもたてずに、智音をデートに誘ったのは良くなかったな」

後悔先に立たずとはよく言ったものであり、デートの約束を取り付けてからあれこれと考えてしまい、非常に残念な感じになってしまった俺なのであった。

さて、時刻は午前9時30分。

結局あの後考え続けた結果、目的地を動物園へと決めた俺は、まだ約束の時間にならないのかと、待ち遠しい気持ちで荷物を確認していた。

「携帯よし、財布よし。後、必要な物があるとすれば、『ふくろ』の中になんでも入っている、と」

雨具から防災道具まで、俺は全て『ふくろ』で管理している為、たとえ災害が起きたとしても、きっと大丈夫である。

「智音、どんな格好で来るのかな？」

残り30分弱、時間を持て余してしまった俺は、それからしばらくの間、智音の格好について妄想しながら時間を潰すのであった。

ガラガラ

「おはようございますー！ 智音、来たよー！」

例の引き戸を開け、玄関から大声で告げた俺。それを聞いて、智音は居間の方から急いでこちらに走ってきた。

「お待たせー！ さあ、魔法使い、冒険の旅に出発しようではないか！」  
そう言つて、につこりと微笑んだ智音。

俺はその時、智音の履いているデニム生地 of 短いパンツから覗く、真っ白で綺麗な太腿をまじまじと見つめてしまっていた。

「あの、魔法使い？ えっと、そんなにじっと見られちゃうと、ちよつと恥ずかしいよ……」

「あ、ああ、ごめん！ あんまりにも綺麗だったから、つい目がいつちやつて」

気付いた時には、既に心の声そのまま口に出てしまっていた。

俺のその心の声を聞いた智音は、更に一段と恥ずかしそうに足を手で隠そうとしている。

そのいじらしい智音の姿を見た俺は、再度口から流れ出るようにして、

「智音、めちやくちや可愛い。マジ天使」

と、言ってしまうのであった。

「はう!?!」

仰け反って大きく反応する智音。

俺が何ができる度に、智音には追い打ちをかけてしまっているようであり、もう降参ですと言わんばかりに智音は両手でバツ印を作っている。

「ま、魔法使い、私の負けだよ……。だから、お願いだからこれ以上私に追撃をかけないでえ！」

涙目になりながら上目遣いで懇願してくる智音、もとい魔法魔王少女。

このままもつと責め立てれば、一体智音はどうなってしまうのだろうかという好奇心に駆られてしまう俺であったが、今日の目的は楽しいデートであるため、それはさすがにやめておこう。

「ごめんごめん、もうしないから。大丈夫かい智音、動ける?」

「魔法使いに悪気が無いのは分かっているけど、そんなにいっぱい嬉しい事言われたら、私壊れちゃうよ……」

ああ、もう可愛いな!

このままだと、また同じ事を繰り返してしまいそうになった俺は、空気を一旦変えるようにして、

「よし、じゃあ行こうか智音! 今日は一緒に目いっぱい楽しもうな!」

と、言った。

智音もようやく落ち着いてきたようで、それに対して、

「うん！ 魔法使い、よろしくね！」

と返してくれるぐらいまでには回復した。

それから智音に忘れ物は無いかを確認した俺は、智音の手をしっかりと握りながら、『ルーラ』を唱えて目的地に向かうのであった。

## 契約の…恋人魔法（後）

俺たちは今、『ルーラ』の移動した先である、とある駐車場の人気のない隅っこに居た。

「え、あれ？　今、家から出たはずなのに……え、何が起きたの？」

俺の隣で智音は、突然周囲の景色が変わった事に混乱している。

確かにそんな反応になってしまうのも無理ない。もし、俺が今の智音と同じ立場だったら、智音と同等かそれ以上に狼狽えてしまっている事だろうからな。

だから、俺は智音の疑問に答えて、少しでも安心してもらおうと現状の説明を始めた。

「えつとな、今日は智音と一緒に動物園に行こうと思っていたんだ。それでここは、動物園の近くの駐車場。何で家から出たばかりなのにここに居るかというのは……そう、魔法でね」

智音には、その髪をピンクに変えたりだとかの魔法を見せた事はこれまで何回かあったものの、『ルーラ』、分かりやすく言えばテレビポートのように、これぞ不思議な力！　みたいな魔法を見せたのは、小学生の頃以来だ。

だから、智音の混乱が治まるまでには、もうしばらくかかるかな？　と思っていたのだが、その予想に反して智音はすぐに適応したように、

「さすが魔法使い！　空間移動まで身に付けているとは恐れ入ったよ！」

と言って、俺の魔法を受け入れてくれたようだった。

「ありがとう、智音。じゃあ、早速行こうか！」

「うん！」

……智音と手を繋いで、動物園の入園ゲートへと向かっている途中、俺は、こんな不思議な力を持った人物を怖がらないでくれる智音や両親、クラスメイトといった周りの人々に、心の底から感謝の気持ちが届きあがってくるのであった。



さて、俺の心情はとりあえず横に置いておき、俺と智音は日本で最北に位置する動物園に入った。

まずは、もうじゅう館から。

「おー、百獣の王だー!」

「やっぱり動いていると迫力あるな!」

普通、昼でも大体寝ているライオンだが、今日は珍しく、のそのそと動き回っているのが強化ガラス越しに見えた。

隣の方に目を移すと、智音は楽しそうにポーズを取っていた。

「ユキヒョウだ! ふわふわしていて、抱き締めたら気持ちよさそう  
〜」

「それに、あの肉球もぷにぷにしている感じ心地が良さそうだな」

一般的に動物園では、動物の姿形を見せることを主眼とした「形態展示」をとる所が多い。

しかし、この動物園では動物の行動や生活を見せる「行動展示」を導入していて、例えば、空中に迫り出した檻を作ることで、ユキヒョウがそこまで岩を登る様子を見る事が出来たり、ユキヒョウを真下から観察する事が出来るのだ。

「はあく、ユキヒョウ可愛いなく。使い魔にして使役できないかな?」

「もし使役出来たら、岩山とかを颯爽と駆け上がれるかもな」

どうやら智音はユキヒョウを気に入ったようであった。

とはいえ、さすがに本物のユキヒョウを捕まえてくる事は、いくら呪文を使っても不可能なので、せめて後でぬいぐるみを買ってあげよう。

……ここで、智音の方が可愛いよと言ったら、それはさすがにキザすぎるだろうか。

あー、でも言ったら智音はどんな反応を返してくれるのかな。気になる。

俺がそんな好奇心との狭間であれこれ考えていると、智音はいつの間にか次の展示へと歩を進めており、

「おーい魔法使い! 見て見て、ヒグマだよ! 大きいねー」

と言って、既に檻の向こう側に立っているヒグマの巨体を見上げて

感嘆の声を上げていた。

「おお！ まさに山オヤジって感じで威厳があるなー！」

俺は智音にそう答えながらも、智音に可愛いと言い損ねた事を少し残念に思ったのであった。

この後、俺たちはクロヒヨウが木に登る姿を見て、その軽い身のこなしに感動したり。

ペンギン館の水中トンネルで、ペンギンが空を飛んでいるように泳いでいる姿に見とれていると、物凄い勢いで目の前を横切ったペンギンがいて、智音と二人一緒に驚いたり。

クモザルとカピバラが同じ放飼場で生活している混合展示に感心していると、クモザルとカピバラが、目と鼻の先で昼寝をしているのが見えて微笑ましく思ったり。

とにかく、動物園ってこんなに楽しい所だったつけと考えてしまう程に、俺たちは心から楽しんだのであった。

……楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうもので、いつの間にか動物園に入ってから3時間が経過していた。

時計を見るともう昼の1時を回っていて、さすがにお腹がすいてきた。

「智音、そろそろ昼御飯を食べに行かないか？」

俺がそう提案すると、智音も同じ考えだったようで、

「そうだね。いくら魔力を使って空腹を凌ぐことができる私といえども、さすがにお腹ぺこぺこだよ」

と言って、お腹に手をあてる。

「折角だから、何かこの辺の美味しいものを食べていくか。智音は何がいい？」

俺がそう聞くと智音は、腕を組んで、うーん、と可愛く唸りながら考え込む。

すると、智音は何か思い付いたようで、勢いよく、

「ラーメンー！」

と言ったのだった。

「ん〜！ 美味しい〜」

ずるずると豪快に麺を啜りながら、幸せそうな顔をしてそう言う智音。

しかし、何だ。智音がラーメンを好きだとは知らなかったな。

俺がそう思っていると、智音は俺の心を読んだように、

「ラーメンは好きなんだけど、ラーメン屋に一人では入りづらいんだよね……。だから、今日は魔法使いと一緒に良かったよ！」

と、笑顔で言った。

まあ、智音が喜んでるようだし、新しい智音の一面も見れたから俺も良かったよ。

「ごちそうさまでした」

ラーメンを食べ終わり、ぶらぶらと近くを歩き始めた俺たち。

ちなみに動物園からラーメン屋までは『ルーラ』でひとつ飛びしてきた。

あのラーメン屋は、俺の前世で食べた時に美味しかった店だったのだが、今世でもあつて良かった。

さて、智音と会話を楽しみながらしばらく街を歩いていると、ゲームセンターがあるのが見えた。

「あ、ゲーセン発見！ ねえ魔法使い、ちよつと寄つてかない？」

「いいね。腹ごなしに遊んでいくか！」

そうして乗り気でゲーセンに入つていった俺たち。ゲーセンの中は結構広く、多種多様な機種が置いてあった。

「それじゃあ魔法使い。勝負だよ！」

ゲーセンに入った途端に、俺にそう告げる智音。

「いいだろう。その勝負、受けて立つ」

それに対して俺は、ノリノリで答えたのであった。この後、ぼろ負けするの知らずに……。

「いやいや、完璧だと思っていた魔法使いにも弱点はあったんだね」  
「くっ！ テトリスだったら負ける気はしないのに！」

勝ち誇る智音に対して、負け惜しみを言う無様な俺。  
言い訳をさせてもらうと、ゲームがあまりにも進化していて驚いたんだよ！ 何だよ、手を上にあげる動作って！ それを認識できるなんて、凄い技術だな！

俺が大人げなく、勝負に負けたことを悔しがっていると、智音は俺に無慈悲な宣告をする。

「じゃあ、勝った魔王の命令を、一つだけ魔法使いに聞いてもらいましよう」

やや芝居がかった口調でそう言う智音。

そんなの聞いてない！ と、ここで言ってしまうのは、さすがに無粋ってもんだろう。

「分かった。煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

そんな事言いつつ、本当にそうされたら即刻『リレミト』で脱出だななんて頭の片隅で考えていると、智音が口を開く。

「魔法使いは、魔王に永遠の忠誠を誓いなさい」

……その言葉に、俺は一瞬理解が追いつかなかった。

これはどういう意味だ？ 忠誠ってどういう事だ？

頭の中で、ぐるぐると智音の言ったことについて考えていると、俺は智音の顔が真っ赤になっているのに気付いた。

ああ、そうか。智音は……智音は、ずっと俺と居たいって言うてくれているんだ。

それなら、俺もそれに応えないとな。

「はっ、私は永遠に貴方様のお傍に……」

ちゅっ

俺は跪き、智音の手の甲にキスをした。

そのまま顔を上げて智音の方を見てみると、智音は嬉しそうな表情をしているものの、どこか残念そうな表情も同時に浮かべているよう

だった。

勿論、そんなの分かっていたさ。実質プロポーズしたようなもんなのに、その反応じゃ不満だよな。

でも、こんな不特定多数の人が集うゲームセンターなんかで智音へのファーストキスをするのは嫌なんだよ。俺の勝手な我儘だけだな。

……俺が忠誠を誓ったあの後、俺たちは恥ずかしくなってしまう、ゲームセンターをすぐに出て、『ルーラ』で家へと逃げ帰ってきた。

もうそろそろ日が暮れる。楽しかったデートも、これで終わりだ。

「……」

「……」

しばらくの間、二人とも無言のまま沈黙が続く。

「あ、あの」

「あのさ、」

タイミングが良いのか悪いのか、二人の言葉が被ってしまう。

「あ、智音から先にどうぞ」

「う、うん。えっと、魔法使い。今日は凄く楽しかった！ ありがとう！」

智音はそう言って、ぺこりと頭を下げた。そして、そのまま俺が何か言うのを待たずに、踵を返して帰ろうとする。

「智音！」

俺が大声を出したのに驚いたのであろうか、智音は肩をビクつてさせ立ち止まる。

「智音、俺の言いたい事がまだ残っている」

「……うん」

俺は、一つ深呼吸をして智音に言う。

「さつき、俺が智音に忠誠を誓った時、手の甲にキスをしたのはそれが忠誠の証だからだ」

そこで、俺は一度言葉を切る。

自分の心臓がバクバクとうるさい位鳴り響いているのが良く分かる。

さあ、伝えなければ。俺の想いを智音に！

「俺は智音が大好きだ。愛していると何回言っても足りない位、智音を愛している。だから、」

チユツ

その言葉を聞いて、こちらに振り返った智音。

俺はその瞬間、智音の唇を奪った。

「俺は未来永劫、智音を愛し続けると約束する。これは、絶対不変の契約魔法だ」

俺がそう言い切ると、智音はその双瞳からぼろぼろと涙を零し始めた。

「もう、そんな事言われたら私、柊くんの事もっと好きになっちゃおう……」

智音はそう言うと、俺の唇に自分の唇をあて、セカンドキスをした。「これは、私からの契約。柊くんを永遠に愛し続ける誓いのキス。これで私たちはずっと一緒だよ」

まだその瞳からは涙が流れているものの、心の底から幸せそうな微笑みを浮かべた智音。きつと俺も、同じような表情をしている事だろう。

そして、そのまま俺と智音はどちらともなくお互いの唇を合わせ、その愛を確かめ合うのであった……。

## 秘密の…生誕祭

月日が経つのは早いもので、智音との初デートから1ヶ月半が過ぎようとしていた。

2週間程前に、中学校の修学旅行で奈良・京都に行った時は、男女別の班である上に、3日間ですべて10ヶ所以上の見学地を訪れる弾丸ツアーであった為、智音とイチャつく事はおろか、まともな自由時間すら無かった。

しかし、後で智音に聞いた話では、智音にとっては日程の辛さよりも、同室の女子達に、文月君とどこまでいったの？ と根掘り葉掘り聞かれてしまった事の方が大変だったらしい。

何があつたのか、詳しくは聞いていないものの、修学旅行以来、にやにやしながら俺と智音の方を見てくる同級生の数が明らかに増えたので、まあ、智音は色々と素直に答えたんだろうな、と予想できる。

さて、北の大地でも段々と暑くなってきた、もう夏だね、なんて言う声が聞こえてくる6月下旬の今日この頃。

俺は、間近に迫った智音の誕生日について考えていた。

「誕生日なあー、何プレゼントしたらいいんだろうか？」

智音の誕生日は、7月6日。

そして、智音は俺が誕生日を知っているという事を知らない。

「やっぱりこの状況なら、何かサプライズして智音を驚かせたいよなー」

ちなみに、何故俺が智音の誕生日を一方的に知っているのかというと、これまた前世の知識だ。偶然だったとはいえ、知っていて本当に良かった。

「また何処かにデートしに行きたいけど、期末試験の直前だし、さすがに無理だよな……」

智音も、前回の中間試験では学年全体で5本の指に入る成績だったのだが、それはあくまでも智音の努力の結果だ。

勿論、俺のような前世というチート無しに、単に純粋な努力だけで

その順位を取る智音には、心からの尊敬の念を抱く。

だがそれ故に、俺が智音をデートへと連れ出した事が原因で、智音の成績が落ちるような事になっては、俺は責任を取ることが出来ない。

「はあ、結局は何プレゼントするかって話に戻ってくるのか」

こんな時、相談出来る相手が居れば良かったのだが、両親に聞くのは恥ずかしいし、正直、クラスメイトにはこの話題を振りたくない。

誰に言っても最終的には、温かい目で送り出されるだけだし。

「いつそ、魔法がかかった物でも作れば良いんだけどな」

冗談半分で言ったこの言葉だが、数分後にそれが実現可能だと分かるとは、この時の俺はまだ知らない……。

時は少し進み、7月5日。智音の誕生日、前日。

今日は学校が休みなので、間近に迫った期末試験の対策の為に、俺と智音は、俺の家で一緒に勉強会をしていた。

カリカリ

勉強を始めてから、二人とも学習に関する疑問がほぼ無い為に、部屋の中にはシャーペンを走らせる音だけが響いていた。

居心地が悪い訳では無いものの、会話が無い現状がどこか物足りない。

ふと、机の向かい側で勉強している智音の方に目を向けると、智音はどうやらさつきから俺の方を見ていたようで、じつとこちらを見つめていた智音と目が合った。

すると、智音はあわあわと慌てながら、視線を問題集へと下ろしたのであった。

そんなところも智音は可愛いな、と惚気ながらそのまましばらく智音を眺めていると、智音は時々ちらちらと俺の方に視線を向けてくる。

しかし、その度に俺と目が合うと、智音はすぐに視線を下ろしてしまふ。

そんな事を何回か繰り返していると、遂に耐えられなくなったのか



智音が沈黙を破った。

「あの、そんなにじつと見られると私、石になっちゃいそうだよ」

「俺はメデューサみたいな化け物になったつもりは無いぞー」

智音のボケなのか中二病なのか、はたまた照れ隠しなのか、若干判別に困る言葉に対して即座にツッコミを入れる俺。

せめて、もう少し例えるのに適した生物は居なかったんですかね、智音さん。石になっちゃいそうだけだと、何を言いたいのか全然伝わってこない。

ボーンボーン

そんな、取り留めのないことを考えていると、いつの間にか時計は昼の12時を告げる鐘を鳴らした。

「丁度いいし、お昼にするか。智音、蕎麦は食べられるか？」

「あ、うん。魔王に食べられない食材なんて存在しないからね！」

腰に手を当てながら、ドヤツとした表情をしている智音。その顔を見るにきつと蕎麦以外のアレルギーも持っていないと思うが、念のため注意はしておこう。アレルギーに対して『ホイミ』効かないし……。

「はい、お待たせ」

「この蕎麦、凄く美味しそうだね！ それじゃあ早速、いただきます！」

「どうぞ召し上がれ」

今日の蕎麦は外も暑い事もあり、シンプルにざるそばにしてみた。冷たいつゆに絡めて食べるこういう日の蕎麦は本当に美味しい。

智音も気に入ってくれたようで、美味しそうな顔をして麺を啜っているようだった。

実を言えばこの蕎麦、昨年の新蕎麦だったりする。それも、保存方法は『ふくろ』であり新鮮な状態のものだ。

本来、北海道で蕎麦の収穫時期といったら9月辺りからであり、7月上旬にはいくらなんでも新蕎麦を食べることは出来ないのだが、そこを可能にしてくれるのが『ふくろ』。

何よりも重宝しているアイテムだ。

「んー、美味しかった！ ごちそうさまでした！」

「お粗末様でした」

俺と智音のざるからは、最初1・5人前ほど盛っていたはずの蕎麦が綺麗に無くなっていった。

少し多かったかな、と思っていたのだが、智音も全部食べてくれたようで何よりだ。

いっぱい食べる君が好きなんてCMもあったけれど、智音のように美味しく食べてくれる人が居ると、作った甲斐があつたところら嬉しく思うもんだ。

「さて、もう少し休憩したら午後も頑張りますか！」

「おー！」

その後、俺たちはしばらく真面目に勉強を続けていたものの、また俺と智音で甘い空気を作ってしまった、お互いの集中力を著しく低下させる事となってしまうのであった。

最終的な結論として、俺たちは勉強を各自で終わらせてから、存分に恋人らしい事をしよう、という事になったのであった。

それからあつという間に時間は過ぎて、時刻は夜の6時。

夏至も過ぎたばかりの今の時期、この時間ではまだ日は沈んでいないために外は十分明るい。

とはいえ、智音に何かあつてからでは遅いので、俺は念のため智音の家の玄関先まで智音を送っていつていた。

「じゃあまた明日な、智音」

智音の家の前に着いて俺がそう言うと、智音はちよつとだけ不満そうな顔をする。

そしてそのまま、目を閉じて俺の方に向かって唇を突き出してきた。

チュウ

「これで満足ですか、魔王様？」

10秒ほどの長めのキスを智音に浴びせると、智音は頬を染めて瞳

を潤ませながらコクコクと頷く。

その仕草に俺は、このまま時が止まってしまえばどんなに幸せだろうか、と心の底から思ったのであった。

さて、そんな次の日、7月6日。待ちに待った智音の誕生日がやってきた。

この日、俺は智音を夜の少し遅めの時間帯に、見せたいものがあると言って呼び出していた。

「おーい、魔法使い！」

午後9時。智音は半袖にショートパンツという夏の暑さに適応した格好でやって来た。

「それで、魔法使い。こんな時間に見せたいものって何かな？」

「さあ、それは見てからのお楽しみということで。それじゃあ、少し移動するよ」

そう言って俺は両手を智音の腰と太腿の裏にまわし、いわゆるお姫様抱っこした。

「わっ、きやつー！」

何とも可愛らしい声を上げて驚いている智音。

持ち上げた智音の身体は、とても軽く柔らかく、それでいて少しでも力を入れたら折れてしまいそうな程細くて……。

一言でまとめると、智音が女の子だという事を再度確認させられるようなその肉体に、俺はとてつもない愛おしさを感じていた。

さて、そんな感動はひとまず自分の心の中に大切に仕舞っておき、俺はいくつか呪文を唱えた。

「智音、しっかり掴まっっているよ！ 『レムオル』『フバーハ』『トラマナ』『トベルーラ』」

「え？ わ、わわ、宙に浮かんだ！」

「これからもっと高くまで飛ぶから、怖かったら目を瞑っているんだぞ」

俺が唱えた呪文の効果は、『レムオル』が透明化、『フバーハ』が寒熱耐性、『トラマナ』が地形ダメージの無効化、そして『トベルーラ』

が飛翔だ。

それらの効果がかかった俺たちの体は、誰にも見られること無いまま、勢いよく空高く舞い上がる。

「すごい、私たち空を飛んでる！」

飛び上がってからしばらく経った今、俺たちは街を一望できる程の高さを飛行していた。

智音も俺の魔法に慣れたもので、飛び始めてからすぐに俺の腕の中ではしやぎ始めていた。

俺が、智音を絶対に落とさないようにと更にぎゅうつと抱きしめると、智音はそれに応えるようにして俺の首に手をまわし、はにかみながら体を密着させた。

智音が抱きしめ返してくれたことを嬉しく思いながら、俺は更に雲の間を縫いながら高度を上げ、遂に雲海を見下ろせる所までやって来た。

「うん、ここなら大丈夫かな」

空を見上げれば、満天の星空とまだ昇っている途中の満月が見え、空と雲に挟まれた俺と智音はまるでこの世界に二人つきりで取り残されたかのような錯覚を覚える。

「これが魔法使いの見せたいもの？ 綺麗な景色だね」

「ああ、待って待って。あくまでもここは舞台であって、俺が見せたいのはもっと違うものだよ」

智音の勘違いを慌てて訂正すると、智音はきよとんとした顔をしている。そろそろネタばらしの時間だな。

「今日、何で俺がここまで智音を連れてきたかというところ、これをプレゼントするんだ」

そう言っただけで俺が『ふくろ』から取り出したのは、ピンクのハートに蝙蝠の羽のような飾り、中央には紫水晶のような装飾品があるステッキ。

まあ、要は中二病でも恋がしたい！ で智音が持っていたあのステッキだ。

「これを私に？」

「何か勘違いされてそうだが、それには魔法の力が備わっている。今の俺のように空を自由に飛ぶ力だ！」

最近俺が一生懸命作っていたアイテムであるこのステッキには、『トベルーラ』の魔法が込められており、使うと空を自由自在に飛ぶことが出来るようになる。

実のところ、『トベルーラ』が発動すると同時に色々な魔法が発動するようにはなっているのだが、一旦それは置いておく。

さて、俺の説明を聞いた途端に目を輝かせ始めた智音。

俺からステッキを受け取り、えいつ！ と智音がそれを振るった瞬間、智音の体は俺から離れて空に浮かび上がる。

「わ、私、一人で空を飛んでる！ これで夢が一つ叶えられたんだ……ありがとうございます魔法使い！」

智音はそう言い、花が咲いたような笑顔を俺に見せてくれた。しかし、これは目的を達成するための準備段階だ。

俺は近くで好きなように飛び回っている智音に向かって大きな声で、

「智音、いや、魔法魔王少女ソファイアよ！ 貴様の力を試させてもらおう！」

と宣戦布告する。

智音は俺のその言葉を聞いて、一瞬面喰らった顔をしたもののすぐに笑顔を浮かべ、楽しそうな顔をした。

その顔を見た俺は、智音がすぐに乗ってくれた事に心の中で感謝しながら、詠唱を始めた。

「爆ぜろリアル！ 弾けろシナプス！ バニツシユメント・デイス・ワールド！」

瞬間、世界は一変する。

月は見た者を狂わせるような深紅に染まり、天に浮かぶ星々は闇に染まった空に塗りつぶされてその輝きを消し、先程まで幻想的に存在していた雲海は姿を消し、代わりに雷鳴轟く暗雲が垂れ込める空間が広がった。

「こ、これは！」

「さあ、ソフィアよ！ 貴様もその杖に願いを込めて詠唱するがよい！」

いきなり変化した世界に凄まじい驚きを見せていた智音だったが、俺の助言をすぐに理解して状況を即座に把握し、智音も詠唱を始める。

「魔王承認、魔法力解放！ ケルビム詠唱 セラフイム降臨 フィジカルリUDGEージ！」

詠唱が終わった瞬間、智音の格好が大きく変わる。

見た者を虜にするような漆黒の衣装に、ひらひらと靡きながら紅く燃え上がる巨大な翼。さすがは現役中二病だ。

「……魔法使い。いざ戦争だよ！」

「ああ、望むところだ！」

その後、智音もとい魔王の究極魔法による攻撃から始まり、俺が炎龍召喚を行うと、智音はすぐに翼によるオールレンジ攻撃で反撃をしたりと、俺たちは一進一退の攻防を繰り返して本気のバトルを楽しむのであった。

しかし、そんな時間もいつか終わりを告げる。

智音は俺よりもよっぽど上手く、この『レミィラ』という魔法を使いこなしており、序盤は年季の差から俺が優勢だったものの、次第に智音に押され気味になってきて、遂に俺は敗れてしまった。

「につはっはー！ 今日のところは、ソフィアちゃんの勝利だね！」

高らかに笑い声を上げながら、勝利を告げる智音。

それに対して俺は、物理的なダメージは全くないのにも関わらず、ボロボロになっていた。主に魔法使いとしてのプライドが。

「いやいや、完敗だよ……。それでは、魔王！ 我に勝った証として、これをやろう！」

そう言っって、俺は智音に近づいてペンダントを手渡した。

「魔法使い、これってもしかして？」

「今日、智音の誕生日だろ？ だから、俺からのプレゼント」

それを聞いた智音は、勢いよく俺に向かって飛んできて、

「魔法使いー！　ありがとうー！」

と、心の底から嬉しそうな表情をして言った。

そしてそのまま俺に深いキスをしてきたのであった。

結局、俺がこの日一番理解した事が何かと言うとだな。

俺はどこまでも智音を愛しているし、智音も俺を愛してくれている。

これって、この上無く幸せな事なんだよな、って事なのであった。

## 運命の…分岐点（前）

時は10月。

北の大地では夏の猛暑もすっかり鳴りを潜め、代わりにやって来たのが実りの秋。

俺は、農家さんや漁師さんから沢山の収穫物や漁獲物を、ありがたいことに頂いていた。

「おい、柊の坊主！ 米できたから持ってきな！」

ある時は採れたての新米。

「おう、柊！ 鮭持ってきたぞ！」

また、ある時は脂ののった鮭。

とにかく1年の内でも1, 2を争う実りの時期である今は貰う農産・水産物もかなり多いので、ご近所さんにお裾分けをしたり、ジャガイモをくれた農家さんにシヤマを渡したりと、とにかく貰った物を美味しい内に誰かが消費できるように努めた。

しかし、それでも残ってしまった物は『ふくろ』で保存して、今後美味しく頂くこうと思う。

そういえば、最近智音は島さん（智音のお祖母ちゃんだ）に料理を習っているらしく、この前智音が作ってくれた夕食はとても美味しかった。

何て言うか、愛情がたっぷり詰まっていると言えはいいのだろうか、幸せを感じさせてくれる味であり、俺は完全に智音に胃袋を掴まれてしまった。

その事を智音に伝えたところ、

「よしっ！ 目標達成！」

と小声で言いながらガッツポーズをしていたので、まあ、なんだ。彼氏冥利に尽きるなあ、と思う俺なのであった。

他にも語っておきたい智音との思い出はいっぱいある。

夏、余りにも暑くて智音とプールに行ったら、智音は身長に対して



わりとたわわであるのが確認出来た事。

登山に行った際に、便利な虫除け呪文である『トヘロス』をすっかりかけ忘れたせいで、二人揃って何箇所も蚊に刺された事。

勿論すぐに『ホイミ』とか毒消しの『キアリー』とかを唱えはしたが……。

それに、近くの神社の縁日にも行った。

浴衣を着た智音は、普段のスポーティーでアグレッシブな格好とは打って変わって、お淑やかさとか清楚さの様な印象を受け、その普段とのギャップに俺はハートを智音に打たれてしまうのであった。

ちなみに、智音は金魚すくいが大変上手だった。

さて、そろそろ本題に入ろう。

希望と絶望のバランスは差し引きゼロと言った魔法少女も居たものだが、世の中は諸行無常である事は確かであり、永遠なんてものは存在しない。

全てのものは、必ずいつか終わりを告げるのだ。

俺はこの事を、これから身を持って実感する事となる。

最近、智音の様子がおかしい。

「魔法使いく、ぎゅーっ」

何がおかしいかというところ、このように智音は自分のキャラを壊す勢いで俺に甘えてくるようになった。

最初の頃は俺も智音に甘えられて嬉しいだけだったが、冷静になつて考えると、智音がこうなつたのには理由がある筈なのに、俺の知っている範囲では全く心当たりが無い事に気付き、不安になつてきていた。

「なあ、智音。最近何かあったのか？」

俺は甘えてきた智音を抱きとめて、頭を撫でながら智音にそう質問する。

「んー？ 別に天使も居なかつたし、龍も見つからなかつたよー？」

いまいち、俺の質問の意図と合っていない答えを返す智音。

俺は知っている。智音がこういうはぐらかした返答をするのは、決まって何か隠している時だ。

でも、多分これ以上問答をしたところで、智音からの答え合わせは無く、今の会話の繰り返しになってしまうだろう。

だって、智音は秘密に関しては、人一倍口が堅いし、どうやらこの質問には答えたくないような感じがするからな。

「でも智音、困ったことがあるんだったら俺は全力でサポートするか、言ってくれよ」

俺がそう言うと、智音は嬉しそうに笑いながら、

「ありがとう、魔法使い！」

と言って、俺の胸に顔をすりよせるのであった。

多分だけでも智音の秘密の答えは、きつと家族のこととかであつて、智音は俺に伝えるようなことでも無いと考えたために、さっきのように質問をはぐらかしたのではないかと、俺は予想は立てていた。

だって俺と智音、ここ2、3ヶ月の間、おはようからおやすみまでとまではいかないが、朝7時から夜6、7時まで平日も休日もほぼずっと一緒に居て、最近では以心伝心で通じ合えるようになっていた。にも関わらず、俺は原因が分からないんだぞ。

それだったら、俺に関わりのない智音の家族、両親とかが原因であると考えるのが妥当だと思う。内容までは分からないけども。

こうして俺は、ごろごろと猫のようにじやれついてくる智音の相手をしつつこのような結論を下し、今はこの甘えん坊な智音を存分に可愛がる事に専念していれば、そのうち智音は元に戻るだろうと軽く考えてしまったのであった。

本当は、これが自分と智音の今後を左右する重要な分岐点の始まりだったというのに……。

柊くん、私にべたべたと甘えられてきつと困ってるよね……。

でも、半年後には一緒に居られなくなるんだし、少しぐらいは許してね。

……はあ、柊くんとずっと一緒に居られたらいいのになあ。

少女がそう暗澹たる気持ちでいたのには、数日前にかかってきた一本の電話に理由があった。

「えっ、引越し！」

携帯電話に耳を当てながら、驚いた声を上げる少女。

それを聞いた電話の相手は、クスクス笑いながら、

「何、驚いてんの。昨年私たちが海外出張する前に言ってたでしょ？」と話している。

「どうやらこの会話を聞くところ、電話の相手は少女の母親らしい。

「私とお父さんはもう少ししたら日本に帰るけど、智音は高校生になっただらばあちゃんの家から戻ってくるんでしょ？ 待ってるからね。じゃあまたね〜」

「あ、ちよ、お母さん！ ……切れちゃった」

少女は、手に持った携帯電話を恨めしそうに睨みつけながら、嵐のような電話をかけてきた母親のことを思い、いらいらした口調で、

「もー！ いっつもお母さんは私の言葉も聞かないままに電話を切っちゃうんだから！」

と、怒ったような、それでいてゆっくり話せなかった事を寂しそうに思っているような事を言うのであった。

しかし、その後すぐ、少女ははっとした表情をしながら、

「あれ？ これつてもしかして、高校生になっただら終くんとお別れ……………」

と言い、しばらく呆然とした様子で座り込んでいた。

普段の彼女からは想像もできないような意気消沈した少女の顔には、音もなく流れ出た一筋の涙が頬を伝っている。

「やっど、やっど大好きな人と会えたのに…………。こんなものってないよお…………」

一言、少女がぽつりと独り言を口に出すと、少女の瞳からは悲しみの涙がとめどなく溢れてきて、堪えきれない嗚咽が部屋の中に響く。

目元を真っ赤に泣き腫らし、誰が居るわけでもないのに駄々をこねる幼児のように、少女はいいやいやと首を振り続けていた。

……そんな声なき悲痛の叫びを長時間にわたりあげ続けていた少女だったが、ようやく少し落ち着いてきたのか、ふうっふうっ、と息切れた時のような呼吸をしているものの、理性を感じさせる表情をしていた。

「すうーはあー……うん、もう大丈夫」

大きく深呼吸をした少女は、自分に言い聞かせるようにして再度繰り返し、大丈夫、大丈夫と呟く。

必死に自分を抑えようとするその姿は、見てて可哀想になるほど辛そうであった。

そして、何度か言葉呟いた後、ふいに少女は口を開き、

「にーはっはー・ さすがのソフィアちゃんとはいえ、これには少しばかり動揺してしまっただよ！」

と、高らかに元気よく声を上げた。

しかし、それが少女のやせ我慢であることは見て明らかなのに、少女は続けて、

「でも、もう問題ない！ こんな経験、これまでだって何度もしてきたじゃないか！ 勇者とだって、森様とだって……」

と、そこまで言ったところで、少女は言葉を詰まらせた。

「……ああ、そういえば、『世界のどこかに必ず居るんだから、別れじゃない』って言葉を教えてくれたのは、柊くんだったっけ。世界の理、連関天則って言っている内に、いつの間にかすっかり忘れちゃったよ。にはは……」

自分の根底にある考えが、自分の愛する人から貰ったものであることを思い出し、少女は力なく笑う。

「全く、柊くんはカッコいいんだから、ずるいよ。本当にずるい」

言葉は責めるようなのに、少し口元を緩ませながらそう言っているために、少女はまるで自分の恋人のことを自慢しているかのような口調になっており、少女が心からその恋人のことを愛しているのが、いとも容易く感じ取れた。

「……うん。やっぱり柊くんには心配かけたくないから、来年の春までこの事は秘密だね」

まあ、柊くんにはバレちゃうかもしれないけど、と小声でぼそっと呟く少女。

実は、少女の心の奥底では、柊くんに気付いて欲しいな、引き留めて欲しいな、と考えているなんて、その思考に蓋をしてしまった彼女自身ですら知らないのであった……。

11月。冬も近づき、辺りには雪虫が飛び交っていて、もう1週間もしない内に初雪が降るだろうというこの頃。

先月にも増して、智音の様子がおかしくなっていた。

「はあ……」

具体的に言おうと、まずは日を経るごとに智音の溜息をつく回数が増え、どんどん増えていつている事。

ついでに言えば、智音は溜息をつくときには決まって、凄く寂しそうな表情をしている。

「智音、大丈夫か？」

「っ！ 柊く、じゃなくて魔法使い。えと、ソフィアちゃんはいつだつて無敵だから、全然平気だよ！」

次に、このように智音は最近、空元気を出す事が非常に多くなった。

智音が自分で分かっているのかは知らないが、そういった智音の言動は、その裏に隠された智音の本当の感情がもろに伝わってくるようであり、正直心配である。

智音はそういうところで素直なんだから……。本当に不器用な子だよ、可愛いけど。

でも、さすがに今の智音は見てて可哀想であり、俺の心が痛む。

智音には申し訳ないけど、そろそろ強引な手段を取ってでも、智音から悩みを聞き出さなくてはいけないのかもしれない。

例えばその悩みが俺にはどうしようもない事だとしても、智音の苦しみを理解してあげる事すらできないのは大変もどかしく、辛い。

「とはいえ、人に話しづらいことってどうしたら話してくれるんだろうな……」

さて、こうして始まった柊と智音の勝負。

自分を犠牲にしても柊の幸せを願う智音と、智音が悩んでいるなら半分背負ってあげたいと思っっている柊の、お互いの優しさから始まったこの勝負は一体どうなることか。

## 運命の…分岐点（後）

智音がおかしくなった理由を、何としてでも聞き出そうと俺が決意したその日の夜。俺は自室で作戦を練っていた。

「まず第一に、智音が嫌がることはしない。とはいえ、そもそもこうして智音から聞き出そうと干渉する事自体アウトなのではとも思ったが、それを言つてはキリがなくなるので、それだけは目を瞑ることにする」

自分のこれからの行動指針を作るため、ノートに色々書きこみながらそう言う俺。

いつも元気いっぱい、常に全力で何事も楽しんでいる智音が、近頃のように哀愁漂う姿で日常を過ごしているのは、見てていたたまれない。

俺は元の、というか普段の智音に戻れるように協力したいのだが、智音は話したくないというジレンマを抱えている。だから、俺が直接的に尋ねるような事をしてしまうと智音は嫌がるだろうし、むしろ心配させまいと思つて笑顔を取り繕うようになってしまふだろう。

「という訳で、俺は智音から話すように仕向けるか、搦め手でいくしか方法がない、と」

そうは言つたものの、そんな方法なんて全然思い付かないのだが、果たして大丈夫なのだろうか……？

結局、それから一晩中ノートと睨めっこしていた俺であつたが、ろくでもないアイデアしか出ることには無かつたのであつた。

例えば、俺がまず最初に思い付いたのは、鑑定呪文『インパス』をかけるという方法。

ただ、この『インパス』という呪文は、本来「モノ」にかける呪文であり、間違つても人に向かつて唱えるような代物ではない。昔、一度自分にかけて実験したことはあるのだが、氏名と性別が表示されるだけであつたので、仮に智音にかけたとしても大した情報を得ることは出来ないだろう。

「おーい、魔法使いーい？」

次の案は、智音を『メタパニ』で混乱させたり、『マヌーサ』で幻覚を見せたりしたらいけるんじゃないか……。

と、一瞬でもそう考えてしまった自分を激しく殴りたい。

「なっ！　ここだけ時間が止まっているなんて！」

大体、俺が智音の誕生日にあげたペンダントには、ほぼ全ての呪文を無効化する仕組みが備わっているから、呪文で何とかしようと考えている時点で無理なんだよな……。

「やはり、この時空凍結魔法を解くためには天使を倒すしか……」

「出来れば、魔法魔王少女からの口づけの方が、俺としては嬉しいかな？」

智音の反応が少し気になったから智音の呼びかけに答えていなかっただけで、別に聞こえてなかったわけじゃないんだよ？

ちなみに、智音は昼休みになったから俺と一緒に昼食を食べようとして俺の元へやって来ただけである。

「え、えつと柊くん？　あの、さすがに人がいっぱいいるこの教室の中の口づけは、いくらソフィアちゃんといえども、恥ずかしい、かな？」

俺からキスの誘いを受けた智音は、わかりやすく動揺していた。だが恥ずかしいと言いつつも、嫌とは言わないあたり、智音もキスをすること自体は満更でもないのだろう。

「最近、智音よく俺にべったりくっ付いているし、こういうことがしたいのかな？　って思っていたんだけどな？」

「あ、あれはその……」

我ながら意地の悪い質問だとは思っただが、智音の反応が可愛くて止めようにも止められない。

俺が智音の顔をじつと見つめると、逆に智音は俺に目を合わせないようにしているのだが、顔が真っ赤になっているのは当たり前だが隠せていない。

「仕方がない。智音が俺にキスしてくれないんだったら、今日はその気になってくれるまで智音を甘やかそうか」



……さて、この時俺は周りの状況を考える余裕が無かったことだけは伝えておく。

つまり何が言いたいかというのだ。今、俺たちが居るのは、昼休み真つ只中の教室であつて、当然周りにはクラスメイトがわんさか居るわけだ。

そんな状況で、こんな台詞を言ってしまったら一体どうなるのか。答えはすぐに分かる。

教室は、キヤアアアアという黄色い声と、ヒューヒューと囁し立てる声が入り混じる、混沌たる空間と化した。

「柊くん、逃げるよー！」

この騒ぎに、一番の被害者であるにも関わらず真つ先に正気を取り戻した智音は、俺の腕を引つ張りながら勢いよく教室を飛び出した。

持ち前の素晴らしい運動能力を存分に発揮し、廊下を非乙女ダツシュで颯爽と駆け抜ける智音に、すれ違う人たちは呆氣にとられていくように、生徒はおろか先生までも俺たちが過ぎ去るのを黙ってみていた。

勿論、そんなスピードだからクラスの人は追つてこないし、智音に手をつかまれている俺も足がもつれそうになつていたりする。

『ピオリム』智音、どこまで行くんだ？」

素早さを上げる呪文を唱えつつ智音にそう尋ねると、智音は俺の方へと振り向きながら、にやつと不敵な笑みを浮かべてこう告げる。

「にっはっはー！……ここは魔王らしく、魔法使いを我が居城へと連れ去らせてもらおうではないか！」

意識すると、午後の授業サボって遊ぼうぜ、ということである。

「ああ、もう！　今更あの教室に戻る気になんてなれないし、どこまでも付き合いますよ。俺の可愛いお姫様！」

「じゃあ、今日は戦略的撤退で決まりだね！」

久しぶりに、智音が心の底から楽しそうな笑顔をしていることに気付いた俺は、この後両親や先生にどれだけ迷惑がかかったとしても、今日ぐらいはこのまま智音のやりたいようにやらせてあげたいと思ひ、智音の提案に乗つたのであつた。

ああ、そういえば、いつぞやの七宮が言っていたっけ。

——迷惑を掛けるっていつも一緒に居ないと迷惑かからないでしよ。って。

……現在進行形で多方面の人に迷惑を掛けながらこの言葉を使うのは、何か間違っているような気がしてならないのだが、今まさにこれを実感中だ。

取りあえず、担任の先生には後で早退の連絡だけはしておこうと考えているうちに、俺たちは生徒玄関を出て校門前までやって来た。

「さあ、いくよ魔法使い！ ケルビム詠唱 セラフイム降臨 フィジカルリンゲージ！」

何故、詠唱をと思つて智音の方を見ると、そこには地面から数十センチ浮かび上がっている智音の姿があった。よく見ると、手には俺が智音の誕生日の時にあげた、ハートのステッキが握られている。

「学校に持ってきていたのかよ、それ。というかどこから取り出した！ ……まあ、いいか。『レムオル』『フバーハ』『トラマナ』『トベルーラ』」

4つの呪文を連続で唱え終わると、俺たちの姿は一般人からは視認されなくなり、何の憂いもなく空を飛べるような状態になる。

「んー！ やっぱり、空を飛ぶのは気持ちがいいね！」

「そうだな。今日はいい天気だし、これで学校をサボっているという事実さえ無ければ完璧なのが悔やまれる」

「につはっはー！ 過ぎたことを気にしすぎるのは、魔法使いの悪い癖だよ。過去を悔やむより、未来に希望を持たなきゃ！」

そう言った智音の顔は、どこまでも真剣で、どこまでも自信に満ち溢れていて……俺は智音のその言葉と表情に、心を打たれたのであった。

「まったく、智音はカッコいいな」

それを聞いた智音は、いつもの高笑いではなく、ふふっ、という軽い笑みを零しながら、

「私はただ、終くんの真似をしているだけだよ。だから、本当にカッコ

いいのは柊くんの方だよ」

と言つて、柔らかに微笑むのであった。

「……」

「あれ。魔法使い、照れてる？」

半分はその通りだ。智音がいつもの中二病モードではなく、偶に見せない乙女モードで告げる言葉には破壊力がありすぎて、不意打ちで言われてしまうと照れるというか、もうなんか、感慨深過ぎて言葉が出なくなる。

ちなみにもう半分は、さっきの俺は智音を甘やかすとか言っていたのに、逆に俺が甘い言葉を言われてしまったことへの悔しさだ。

「本当に、智音には敵わないな」

「にーはっはー！ この魔法魔王少女ソフィアちゃんに勝とうだなんて、いくら魔法使いとはいえ千年早いよ！」

どうやら、智音は普段の中二病モードに戻ったらしく、高らかな笑い声と共に、そんな勝利ボイスで場を締めた。

そうして、このやり取りにひと段落つくと、話題は別な事へと移る。

「あ、見て魔法使い！ あの山、燃えるような深紅に染まっているよ！」

北の大地は秋の到来が早いため、10月の中旬から下旬には山が完全に色づく。その中でも、智音が指差した山は周りの山よりも特段美しい紅に覆われていた。

「おお、上から見る紅葉も綺麗だな。智音、少し降りて見ていかないか？」

「オツケーだよ！ 紅葉狩り、私も一回ぐらいしてみたかったし」

俺の提案に快諾してくれた智音。という訳で、俺たちはその山の開けた所に向かって降下していく。そして、地面に足が着いてふと周りを見渡すと、どこか見覚えのある景色がそこには広がっていた。

あれ、何だったつくと、記憶を辿って思い出そうとしていると、俺が思い出すよりも先に智音が、

「あ、ここって昔、魔法使いに連れてきてもらった場所だ」

と、声を漏らした。

ああ、そうか。ここは智音と、小学生の時に遊びに来た山だっけ。何年も前の事だから、すっかり忘れてしまっていた。

「智音、よく覚えていたな」

「うん、まあね」

俺にとつて、智音と出会ったあの夏の思い出は、とても大切な思い出だ。

智音ちゃんの要望でやって来た、この山へのハイキング。

二人で、一日中熱中して遊んだファミコン。

その他にも、花火をしたりとか川に行ったりとか、色々な事をした。一週間という時間が、あっという間に過ぎてしまったあの夏。

別れの時に俺が口にした、俺たちは世界のどこかに必ず居るんだから、これは別れじゃない。という言葉は、今思えば、自分自身に言い聞かせていたのではないかと感じた。

「そういえば昔、智音が地元に戻るって日にさ、智音ってば帰りたくなかって連呼しながら、最近の智音みたいに憂鬱そうな表情していたよな」

その言葉に、智音はびっくりした顔をしている。何かまずいことでも言ったか、俺？

さて、ここまでの間、智音が近頃おかしかった理由を聞き出そうと考えていたなんて、すっかり頭から抜け落ちてしまっていた俺だったが、今、自分の言った言葉で思い出した。

最近の智音は、あの時の智音ちゃんと同じような表情をしている？

それって、もしかして……？

その疑問を抱いたら、後は早かった。

現在、俺たちは中学3年生で、来年はもう高校生だ。そして、智音と俺が同じ年齢なのを考えると、来年度になったら、中二恋の原作が始まる。

アニメ版では2期からの、2年生になってからの登場だった智音だが、小説版では大体、1年生の夏には既に富樫勇太や小鳥遊六花と関わっている。

さあ、これが何を意味するかというと、少なからずそれまでにはと

いか高校入学の時点で、智音は中二病の舞台である滋賀県近辺へと引越すことになる、という事だ。

だから智音は、最近元気なかったのかな。

そうして下した結論の答え合わせとして、俺は智音に尋ねる。

「なあ、智音。お前、引越すのか？」

俺の質問に何も答えない智音。でも、その沈黙が、俺の予想が正しかった事の何よりの証明だった。

それから、しばらく黙っていた智音だったが、ふいに口を開き、

「なんで、どうして魔法使いは分かったの？」

と、声を震わせながら聞いてきた。

「分かったというより、繋がったっていう感じかな。というか、智音が変だった時点で気付くべきだったのに、こんなに遅く気付くなんて……これじゃあ、智音の恋人失格だな」

ははは、と苦笑いしていると、智音がぎゅっと俺の腰に抱き着いてきた。

「そんなことないよ。本当だったら、何も言わずに進学するつもりだったのに、魔法使いは気付いたんだもん」

「何で、言ってくれなかったんだ？」

「別れは、別れじゃないから。さよならじゃなくて、またねだから。それが、世界の理、連関天則だから」

要するに、智音は寂しかったんだろう。別れが。

けど、連関天則によって定められた、俺が教えたその言葉が邪魔をして、素直に言い出せなかったんだ。これまでの間、ずっと。

「でもな、智音。我慢してばかりいると、それこそ、心と体がしんどいぞ。だから、もういいんじゃないか」

それが引き金となり、智音は俺の腰に抱き着いたまま、堰を切るように涙と言葉が溢れ出した。

「ひっく、魔法使いとお別れなんてやっぱり嫌だよ」

いつぞやと同じような台詞で嗚咽を漏らす智音。俺は、そんな智音の頭を撫でながら、

「でもな、智音。そんなに悲観することは無いぞ」

と言う。智音は顔を上げて、どうしてと叫んだような顔をした。

「俺は魔法使いだぞ。智音の所まで瞬間移動する事も出来るから、毎日だって会える」

そうは言うものの、俺だって智音が居なくなるのは寂しい。だから、今回ばかりは自分の力だけでなく、他の人の力をお借りしようと思う。

さて、俺の言葉にきよとんとしていた智音だったが、少しして、「にはは……。やっぱり魔法使いは、柊くんは凄いや。最初から、伝えていけば良かったな」

と言って、目から零れ落ちた涙を指で拭って、智音は自分の頬をぱんと叩いた。

智音は、本来内気な性格であり、それでいて極めて優秀だった。だから智音は、並大抵のことなら、自分で解決できてしまったのだろう。

智音はきつと人を頼ることを知らないのだ。そして、そんな智音を、俺は心の底から支えてやりたいと思うのであった。

澄み渡る秋晴れの中、俺は、時雨が降っていた智音の心を晴らす事は出来たのだろうか。

まあ、終わり良ければ総て良し、となるようにもう少し頑張ってみますかね。

## 高校生編

### 邂逅の：魔法使い（前）

「ふう、これで片付けは終わりっ」と

俺は『ふくろ』に入れて運んできた荷物を新居に並べ終わって、人心地ついていた。

智音が引越すと知ったあの日から早3ヶ月。思えばあれから色々あったものだ。

智音の引越しの話を聞いてすぐ俺は両親に、智音と一緒に高校に行きたい。だけど智音が引越しをするから、滋賀についていきたいと、必死になって頼み込んだ。

勿論、最初は何を言っているんだとあえなく断られてしまったが、何度も何度も懇願をした結果、遂に条件付きで滋賀での一人暮らしを容認してもらったのだった。

「それにしても、まさか本当に許してくれるとは思わなかったよな」  
実は俺自身、10回目のお願あたりで、これはもう無理なのではないかと半ば諦めそうになっていた。だけど、ちょうどそんな時に母が助け舟を出してくれたのだった。

「柘は、勉強も頑張っているし、家事だって私たちに代わってやってくれている。それに、仕事が忙しくてなかなか柘の面倒を見てあげられていなかったの、柘は私たちに文句ひとつ言ったことない。ね、だから柘のお願いを聞いてあげましょう？」

間延びした声の特徴的な母だが、この時ほど頼りになると思ったことはない。結局、母の説得が功を奏したのか、父も最後には渋々ながら認めてくれるのであった。

ちなみに、その際につけられた条件というのは、

- 1, 試験で全教科、トップクラスの成績を取ることに。
- 2, 住居費や食費などは送るけど、交際費に関しては自分で出すこと。
- 3, それだけ本気なんだったら、七宮さんのご両親にもきちんとして挨拶

拶すること。

以上の3つだ。

1つ目は問題ない。一応、前世でも大学は出ていたし、何より『思い出す』という暗記科目特効を持つ呪文があるので、きちんと努力していれば大丈夫だ。

2つ目に関してはバイトをすれば済む話だし、あとは『ホイミ』で仲の良い、近隣の農家さんや漁師さんから頂いている農作物・水産物が、まだ『ふくろ』の中に大量に残っているので、食費を切り詰めて浮いたお金を使うという手もある。『ふくろ』の内部は時間が止まっているので、腐っていることもないから安心だ。それに『ルーラ』があるから、交通費はほぼかからないに等しいし……。本当に魔法様々である。

問題は3つ目だった。確かに、俺は本気で智音のことを愛しているし、心の底から幸せにしてやりたいと思っている。だけど、だからといってこの年で挨拶というのはちよつと……。

前世で独身だった弊害がこんなところでは出るとは思わなかった。でも、この条件を守れなければ行かせてくれないと言うし、これを智音に相談したら、智音は智音で満更でもなさそうな顔をするし、腹をくくって御挨拶に参りましたよ。

アニメや小説で智音の家族は出ていなかったから、事前情報が智音からの話だけでかなり緊張したけど、結果的に言えばつつがなく終わることができました。

なんだろうか。あの両親あつての七宮智音ありとでも言えばいいのだろうか。智音のご両親は、常識に囚われることも、世間体を気にすることもなく、でもそれでいて一本芯が通っているという不思議な方たちだった。智音のご両親とかそういう以前に、一人の人間として尊敬する生き方をされていて、そういう意味でも御挨拶できて本当によかったと思う。

でも、智音のどこが好きなの？ とか、どこまでいったの？ とかを根掘り葉掘り聞かれたのは疲れた……。最後には、これからも智音のことをよろしく頼むよと、親公認の仲になれてひとまず安心したけ



ど。

「さあ、ここからが本番だ。目指すのは、誰もが幸せになれるハッピーエンド。俺はようやくその第一歩を踏み出したんだ。気を引き締めていかないよ！」

一休みして片付けの疲労を癒した俺は、パチンと頬を叩いて決意を新たにす。とりあえず、今は引越しの挨拶品配る用意をするか。

「でも、まさかこの団地の部屋が空いているとは思わなかったよな」挨拶品にのしをかけながら、独り言を呟く。そう、俺がこれから住むことになるこの家は、驚くべきことに勇太や六花が住む団地の一室なのだ。

最初、こつちでの住居は割とどこでもいいと考えていた。しかし不動産屋に行ってみると、ちょうどこの団地の部屋が空いているではないか。

これを見逃す手はないよなということで、即決でここを借りることにした。両親の許可を得るのは大変だったけど……。でもそのかいあって俺は303号室。つまり、小鳥遊家のお隣さんになることができた。

今はまだ十花さんしか住んでいないだろうが、じきに六花ちゃんも越してきて賑やかになるだろうし、アニメ通りだったら後々七宮家も越してくるだろう。今から楽しみだ。

「さて、のしもつけ終わったし、配りに行きますか」

引っ越しの挨拶品は、地元産のお米だ。せっかくの引っ越しなので蕎麦を贈ろうかとも考えたのだが、アレルギーの方がいたら困るのでやめることにした。調べた所、最近では自治体指定のゴミ袋も挨拶品として人気が高いようだが、上下階とお隣の計5軒分買うのは個人的に懐事情として厳しいので、『ふくろ』の中にやけに大量にあるお米を、綺麗に包みなおして贈ろうというわけだ。在庫処理では決してない。

では一軒目。小鳥遊家へ引っ越しの挨拶だ。

ピンポンとチャイムを鳴らすと、まずダウンナーな声の返事があり、それから廊下を歩く足音が聞こえてくる。どうやら十花さんは御

在宅のようだ。

「……誰だ？」

「今日、隣に引っ越してきた文月と申します。春からこちらの高校に通うため一人暮らしをしております。なにかとご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いします。ほんの気持ちですが、よろしかったらお召し上がりください」

十花さんの姿を見て緊張のあまり早口になってしまったが、ひとまずお辞儀をしてお米を渡す。

「これはごく丁寧にどうぞ」

「……それでは、失礼します」

挨拶できたはいいが、特に十花さんと話すような話題もないので手短に切り上げて帰ろうとしたその時だった。

「魔法使いー！」

タイミングが良いのか悪いのか、階段を駆け上がる音と共に智音の声が聞こえた。

俺が思わず智音の方を見ると、今まさに玄関を閉じようとしていた十花さんもつられてそちらの方に顔を向ける。

智音は首元に青の長マフラーを巻き、トレードマークのピンク髪はどういう構造なのか聞いてみたくなるようなツイインリング。それに目尻には自分設定用のハートのシールが貼られていて、どこからどうみても紛うことなき中二病だった。

「知り合いか？」

「はい。大事な人です」

分かるか分からないか程度に眉間にしわを寄せて、俺に智音との関係を尋ねる十花さん。それに正直に答えると十花さんは、そうかと言だけ呟いて家の中に入っていった。さて、この予想外の出会いが、吉と出るか凶と出るか。とんでもないバタフライエフェクトが起こらないことを祈るばかりだ。

「にはは……。どうやらお取込み中だったようだね。ソフィアちゃん失敗失敗」

智音は俺が誰かと話していたことに気付いたようで、申し訳なさそ

うな顔をしている。こういうところが智音の良い所だよな。自分が邪気眼中二病患者だと自覚しているがため常識も持ち合わせており、失敗を反省できる。まあ、常識よりも面白さ優先な気がないわけではないけども。

「そんなに気にするな。それよりも智音が来てくれてよかった。これから懐かしい人に会えるかもしれないぞ」

「懐かしい人？」

さあ、次の挨拶先は富樫家だ。

勇太や樟葉は、原作よりも1年早い智音との再会で、一体どんな反応を見せてくれるのだろうか。楽しみだ。

## 邂逅の：魔法使い（後）

十花さんに引越しの挨拶をしたその後、俺は上階と真下の部屋住んでいる方の3家庭に挨拶を済ませ、次はいよいよ富樫家の番。

ここが魔法使いの新たな拠点かーと言っていた智音も連れて、いざ参らん！

ピンポンとチャイムを鳴らすと、はーいという少女の返事が聞こえる。智音はまだ気づいていないようだが、十中八九この声は樟葉ちゃんだろう。

参考までに軽く説明すると、樟葉ちゃんとは富樫勇太の上の妹で、料理上手なしっかり者だ。確か勇太と3歳離れていたはずだから、ちょうど勇太や俺たちが高校生になるタイミングで樟葉ちゃんも中学生になるはず。

ちなみに、勇太の下の妹は夢葉ちゃんといってまだ5歳の幼稚園児だ。

そんなことを思い出している内に、ガチャという鍵の開く音がして、私服姿の樟葉ちゃんが顔を出す。

「どちら様でしょうか、って智音ちゃん？」

「樟葉？ 樟葉だー！」

樟葉ちゃんが気付くと智音も思い出したようで、智音は樟葉ちゃんをその胸に抱きしめて再会を喜ぶ。

「樟葉、久しぶり！こんなに大きくなっちゃって！」

「だって3年ぶりだもん。そういう智音ちゃんはあるまり変わらないね」

樟葉ちゃんは、智音に抱きつかれたときは驚いていたものの、すぐに嬉しそうな表情になって智音と会話を交わす。

「いやー、びっくりだよ！このままだと、魔界無節足虫くらい大きくなるね！」

「む、無節足？」

いきなり中二病ワードを会話の中に盛り込まれて、困惑の表情を浮かべる樟葉ちゃん。智音らしいと言えば智音らしいのだが、『中二病

でも恋がしたい！』において唯一と言っても過言ではない常識人に、そういうことを言うのはやめてあげなさい。

「あの、それでお兄さんは……？」

二人の再会もひと段落したところで、それを横で眺めているだけの空気と化していた俺のことを拾ってくれる樟葉ちゃん。ああ、優しさが身に染みる。

「魔法使いは、私と共に旅するパートナーで、前世からの因縁で結ばれた魂の契約者だよ」

「智音、何も伝わってない。えーと、今日上の階に引越してきた文月です。智音とは前の学校で知り合った仲で、富樫勇太という方の話をよく聞いていたので、もしかしたらと思っていたのですが——」

「はい。富樫勇太は私の兄です」

もちろん、分かっていますよ。むしろここで、勇太なんて人知りませんとか言われたら『中二病でも恋がしたい！』というストーリー自体が崩壊しかねないから、存在してくれて本当に良かった。

「ちよつと待つててください。今、呼んできますね」

樟葉ちゃんはそう言うと、勇太を呼びに一度家の中に入っていく。

あ、生きているキャラに会えるという嬉しさが先走りすぎて、挨拶品を渡しそびれてしまった。失態を犯したなと心の中で反省していると、智音が俺に話しかけてきた。

「魔法使いは、やっぱり魔法使いだね」

「なんじゃそりゃ」

「にーはっはっ！ 分からないならそれでいいのさ！ ……私にとつて柊くんが大切な存在だっていう、ただそれだけのことだから」

突然、智音が真面目な口調で愛をぶつけてくるものだから、俺は驚いて智音を見つめてしまう。

そこには、顔を赤くするわけでもなく、寂しそうな顔をするわけでもなく、ただいつも通りの笑顔でいる智音の姿だけがあったのであった。

「そうか。俺にとつても、智音はこの世で一番大切な存在だからな」

共用階段でバカツプルの会話を繰り返していると、奥から半信半疑

な表情を浮かべる勇太が現れる。髪型と服装を見る限り、一応中二病は卒業（仮）していることが窺い知ることができる。

「あ、勇者だ。おーい、勇者ー！」

「七宮!？」

智音が勇者もとい勇太に手を振ると、ようやく智音がいる実感を得たようで慌てて駆け寄ってくる。

「勇者、久しぶりー！」

「お前、今までどこにいたんだよ」

「各地で天使との戦いに身を置いていてね。いやー、どこも激戦だったけど新たな仲間も増えて、ソフィアちゃん大勝利！」

勇太と智音は、積もる話もあるのだろう。すぐに止め処なく語り始める。

このような再会の邪魔するのは大変気が引けるのだが、敢えて言わせてもらおう。

「あの一、俺の事も忘れないでもらえませんかね」

「二あ」

勇者と魔法魔王少女は同時に、気まずそうに返事をしたのであった。

その後、折角だからということ富樫家にお邪魔させていただくことになった俺と智音。

そこでは昔の話で盛り上がる智音に、合の手を入れる樟葉ちゃん。そして、黒歴史に悶え苦しむ勇太の姿があった。俺？ アニメでも見たことのない光景が目の前に広がっていることに感動しながら、でも若干の疎外感を覚えつつ聞き役に徹しているよ。

ちなみに夢葉ちゃんは今、お母さんと一緒に出かけているらしい。そのお二方にも会ってみたかったのだが残念だ。

「そ、それよりも、七宮と文月さんはどこの学校に？」

遂に黒歴史に耐えられなくなった勇太は、話題を自分から俺と智音に移そうとする。さすがに勇太が可哀そうだから、その話題に乗っかるかな。

「同じ年だし、さんはいらないよ」

一方的とはいえ、知っている人から他人行儀な呼び方をされるのは心にクるものがあるので、俺は勇太にそうお願いをする。

「分かったよ、文月」

「それで、学校だっけ。俺も智音も私立銀杏学園に行く予定」

そう。小説版でもアニメ版でも、智音は勇太や六花の通う私立銀杏学園とは別の高校に進学していた。しかし、様々な要因が重なった結果、智音も一緒にその学校に通うことになった。

これが原因で一体どのような化学変化が引き起こされるのか。楽しみな反面、ちよつと怖かったりする。主にモリサマーがどうなるのか……。

「ああ、やっぱりそうなるのかあ」

勇太は俺たちの進学先を知って、頭を抱えて悩み込んでしまう。

まあ無理もない。勇太は、中二病時代の自分を知る人が誰もいない環境に行きたくて、私立銀杏学園に高校を決めたんだからな。そこに智音という、自分の中二病の師匠がいるとか発狂してもおかしくない。

結局、六花がいるから変わらないんだけどな。

「ドンマイ、富樫」

「……そういう文月はどうなんだよ。七宮と一緒にだっけということは、文月も中二病を患っていたんじゃないのか」

俺が勇太を慰めると、思いを共有できる仲間が欲しいのか、俺を道連れにしようと尋ねてくる。だが残念だったな。こちとら魔法が生活の一部になっていいるんだよ。

「俺は現役魔法使いだからな。あいにく、富樫の悩みを分かってあげることができないんだ」

そう答えると勇太はコイツもか！ といった目で俺を見てくる。だって俺もなんでか分からないけど、本当の魔法を使えるんだもん。

とはいえ、ここで下手に勇太に魔法を見せてしまっただけでは、中二病を再発させてしまう可能性がある。もし万が一そんなことになったら、勇太と六花の物語が進行しなくなるかもしれないので、しばらくは勇

太の前で堂々と魔法を使うのは控えよう。それに、黙っていた方が後々面白いことになりそうだからね。

勇太に軽く失望された後、智音がそろそろ帰らなきやということ、楽しかったこの雑談会も終わりを迎える。

勇太と樟葉ちゃんは、よければ夕食を食べていかないかとありがたいお誘いをしてくれた。しかし、智音は家族と用事があるようで、俺も周辺の主要地点を『ルーラ』の行先に登録する作業をしておきたいので、今日のところはおいとまさせていただく。

それにしても、本当に優しい兄妹だ。智音がいたとはいえ、今日初めて会った俺にまで声を掛けてくれるなんて……。六花は勇太のこんなところにも惹かれたのだろうか。なんとなくそんな感じがする。俺も見習わねばな。

「とても楽しい時間だったよ。ありがとう」

「それじゃあ勇者、樟葉、またね！」

玄関まで見送ってくれた勇太と樟葉に挨拶をして、俺は智音を家に送り届けてから寄り道をしつつ帰路につく。魔法は使わずに電車と歩きだ。

これから通うことになる高校や、近くのスーパー、それからアニメで度々登場する公園など、聖地巡礼気分でまわっている内にあたりはどんどん暗くなってくる。

そろそろ本当に帰らないといけないなど、一度スーパーでいくらあっても困らない類の調味料を調達してから『ルーラ』で家の近くまで飛ぶ。そして、3階の部屋までの階段を上がっているその時、俺は何者かに話しかけた。

「遅かったな、文月終」

そこには、壁にもたれかかりながらこちらを見下ろす十花さんの姿。まさかの状況に俺は気が動転してしまい、焦って返事をしてしまう。

「……十花さんでしたか。なぜ、そんなところに」

「文月終。お前に聞きたいことがある。……だがその前に、なぜお前は私の名前を知っている？」



「十花さんこそ、なぜ俺の名前を？」

ぼろを出した俺に、十花さんはすぐさま鋭い目になって質問をしてくる。正直言つて、美人にこんなことをされると凄く怖い。

けれども、ぼろを出したのは十花さんも同じ。実際には、質問を質問で返すのは悪手なのだが、今の俺にはそれしか方法がなかった。まさかこの世界が、パラレルワールドでは創作上の物なんですとは口が裂けても言えない。

十花さんはしばらくの間沈黙していたが、やがて射抜くような目つきを止め、ピーンと張りつめていた空気は穏やかなものへと様変わりした。

「まあいい。それよりもあのピンク髪のことだ」

「智音のことですか」

「お前は見たところ普通のようだが、ああいう類のやつとどうやって仲良くなったんだ？」

「どうやら十花さんは中二病患者、つまり六花と仲良くなる方法を知りたいらしい。」

言葉や行動から勘違いされそうだが、十花さんは心から六花の幸せを願っているんだ。上手くかみ合わずに空回りしている部分もあるが、根つこの部分は六花が大好きなのだろう。

こうして中二病のことを理解しようとしているのがその証拠だ。時に厳しい事を言ったりもするが、それも不器用な姉なりの優しさだったのだろう。

「俺の場合は、智音の中二病などころも含めて大好きだから付き合っているんです」

「直したいと思つたことはないのか？」

「一度もないです。——誰かに迷惑を掛けない生き方は嫌だ。だって誰かに迷惑を掛けないって、誰とも一緒に居ないことと同じだから。……俺は、尊敬しているんです。そんな信念を持ち続ける彼女を」

俺は、前世では七宮智音というキャラクターの外見的な可愛さから入った人間だった。そして、小説やアニメを見ていくうちに、その生き様に憧れるようになった。そういう意味では、俺は勇太や丹生谷と

同じなのかもしれない。

しかし今世で智音という血の通った人物と出会い、俺は彼女を幸せにしたいと強く願うようになった。

なまじ頭が良いだけに、智音は自分一人で悩みを抱えて、自分一人で解決に導こうとする傾向がある。だからこそ、そんな智音を隣で支えてあげたい、守ってあげたい。そんな思いを今は持っている。

そんな俺の心情をどこまでくみ取ったのかは分からないが、十花さんはそれ以上何か反論することはなかった。

やっと十花さんとの会話が終わると安堵していたら、お礼だと言われてタッパ―に入ったおかずを貰ってしまった。一瞬いいのかなと思っただが、くれるというのでその日の晩に美味しくいただきました。

これを機に、十花さんとの交友関係ができたというのはまた別の話。